

漢文典に關する書籍

古いものでは、伊藤東涯の用字格とか、皆川淇園の助辭詳解とか、東條一堂の助辭經譯、清の王引之の經傳釋詞とかいつて、助字を解説したものが有るだけで、文典と雖まつたものはない様である。

近頃のものでは、清人馬建忠の著した馬氏文通、それから兒島猷吉郎氏の漢文典などもあるが、廣池千九郎氏の支那文典に優るものはない。

作文

吾が家庭(普通文)

解釋

一 殿(道長)の御夢に南殿の御うしろ必ず人の參るに通る所よなそこに人のたちたるをたれぞと見れば顔は戸のかみにかくれたればよくも見えずあやしうてたぞくとあまたたび問はれて朝成に侍りといらふるに夢の中にもいとおそろしけれと念じてなどかくては立ち給ひたると問ひ給ひければ頭辨のまゐらるゝを待ち侍るなりといふと見給ひておどろきて今日は公事ある日なればとくまゐらん不便なるわざかなとて夢に見え給ひつる事あけるを

ふは御病申しなどもして物忌かたくして何かまゐり給ふこまかにはみづからと書きて急ぎまつり給へどもちがひていとくまゐり給ひにけりまゐりのこはくやおはしけん例のやうにはあらで北の陣より藤壺後涼殿のはさまより通りて殿上にまゐり給へり。(大鏡)

(解釋) 殿の御夢に云々。南殿は紫宸殿、念じてはちつと怵へての意、頭辨は藏人頭で辨官を兼ねたもの、こゝでは行成をいふ。道長の御夢に、紫宸殿の後ろのきつと人が殿上に參るに通るべき所ですよ、そこに人が立つてをるから、誰だらうと見ると、顔は戸の上に隠れてよく見えない、怪しいから、誰だくと幾度も尋ねられたから、己むを得ず朝成である。と答へられた。夢の中ながら、實に怖かつたが、ちつと堪へて、なせかやうに立つて居なされる。ときいた處、頭辨の殿上にまゐられるを待つてをるのである。といふと見なされて驚いて、今日は公事のある日であるから、藏人頭たる行成は、職務上人より早く參内するであらう。今に朝成の悪夢になやまされるで有らう、氣の毒な事である。と思つて、次の手紙を認めてやつたといふのである。○夢に見え給ひつる事あるを云々。なにかまゐり給ふ、參り給ふに及ばずの意。奉りは遣す意の敬語。私は御身の事について、怖い夢を見たから、今日は病氣と申立て、參内

せず、堅固に物忌して、内に引籠り給へ、是非く參内するには及ばぬ。尙詳しくは拜顔の上申上げよう。と急いで書面をやつたが、道長の使とは行違ひになつて、行成は早く參内せられたとなり○まもりのこはく云々。まもりのこはくやおはしむ、運が強かつたであらうの意。北の陣、朔平門のこと。さて行成は、運が強かつたであらう、いつもの通りでなく、北の陣から、藤壺後涼殿の間を通つて、殿上に参りなされた。との意。この末段を詳解などには、道長の事にしてあるが、苦しい解釋であると思ふ。朝成の伊尹公に對する怨から、一條家に祟をなせる事を書いた一段である。

落合、小中村著 大鏡詳解 明治書院發行

鈴木弘恭著 大鏡註釋 青山清吉出版

(此書の方が價が安く良本である)

二 あすかぬにやどりはすべしかげもよしみもひもさむしみまくさもよし。

(解釋) かげは蔭で木蔭のこと。みもひは盃で水を入れる器、それより轉じて水のことといふ。みまくさは馬糞。さて大意は、飛鳥井に宿をとるがよい、木蔭も涼しく、水も清冽で、又そのあたりには、馬に飼ふべき草も茂つてをるから、實によい處であるといふ意の催馬樂である。

讀方及解釋 (第一種志願者の分)

一本紙に句讀反り點送り假名を附し別紙に解釋すべし。
齊帥伐我。公將戰。曹劌請見。其鄉人曰。肉食者謀之。又何間焉。劌曰。肉食者鄙。未能遠謀。乃入見。問何以戰。公曰。衣食所安。弗敢專也。必以分人。對曰。小惠未徧。民弗從也。公曰。犧牲玉帛。弗敢加也。必以信。對曰。小信未孚。神弗福也。公曰。小大之獄。雖不能察。必以情。對曰。忠之屬也。可以一戰。戰則請從。公與乘。戰于長勺。公將鼓之。劌曰。未可。齊人三鼓。劌曰。可矣。齊師敗績。公將馳之。劌曰。未可。下視其轍。登軾而望之。曰可矣。遂逐齊師。既克。公問其故。對曰。夫戰勇氣也。一鼓作氣。再而衰。三而竭。彼竭我盈。故克之。夫大國難測也。懼有伏焉。吾視其轍。亂。望其旗。靡。故逐之。

(語釋) 肉食者は、位に在る者をいふ○間は猶ほ與るの如し、容喩すること○弗敢加也の加は、定數を増加する意○孚は大信。

(意解) 齊の師が我を伐つたから莊公は將に戦はんとした。そこで曹劌が御目通りを

して意見を述べようとした處が、其郷人が曰ふやうには、俸祿を受けて位に在る者は之を謀るがよい、吾々は何にも容喙するに及ばぬ。とかう曰うた。劔が曰ふには、仕へて居る者は、心事が鄙いから、未だ遠く謀ることは出来ないと、そこで參内して御目通りをして問ふやうには、如何にして戦をなされますかと、公が曰ふには、衣食は人の身を安んずる所であるから、敢て専有せず、必ず人に分配して與へると、對へて曰ふには、其は小惠といふもので、惠む所は御側の人に過ぎない。これでどうして民が従ひませう。決して従ひますまいと。公が又曰ふやうには、宗廟に供へる生贄や玉帛の類は、敢て定數を増加することなく、必ず信を以てすると。對へて曰ふに、其は小信で有つて、未だ大信でないから、神といふ者は之に福を下すものでないと、公が曰ふのに、小大の認獄には、その事情を審にすることは出来なくとも、輕過必ず情に従つて、其罪跡ばかりでは定めないと、對へて曰ふに、これは、上として下民の利となることを思ふので有るから、忠といふべきである。斯様の心があれば以て一戦してもよい。若し戦はんと思召すならば、御供を致しませう。と曰うた。莊公は曹劔と兵車を共にして、長勺といふ處に戦つた。公が將に鼓を打たうとしたが、劔が曰ふに

はまだ宜しくありませんと、齊人が三度鼓したから、劔が曰ふにもう宜しいと。それから一鼓して大に齊師を敗つた。齊師の敗績するのを見て、公は之を追跡しようとしたが、劔が曰ふやうには、宜しいと。遂に齊師を逐うたものであるから、大に克つことが出来た。公がその譯を問うた處が、對へて曰ふには、戦争といふ者は勇氣である。一たび鼓せば、元氣が非常に作る。二度目には衰へる。三度目には元氣が抜けて竭きるものである。彼齊師の竭きた處へ、我は滿々たる元氣で打入るのであるから、克つことは勿論である。夫れ大國は油斷のならぬものである、詐り奔つて我を伏に陥れるのかも知れぬ。吾其車轍を見るに亂れ、其旗を望むに靡いて居る。これは何れも周章狼狽して居ることが確であるから、之を逐うた。是勝つことの出来た譯である。

二 本紙に句讀反り點送り假名を附し別紙に意譯すべし。

中國政府允許設一日中木植公司。在鴨綠江右岸地方。採伐木植。至該地段廣狹年限多寡暨公司如何設立。並一切合辦章程。應另訂詳細合同。總期中日股東利權均攤。(日清協約第十款) 中國政府は、一箇の日清材木會社を鴨綠江の右岸に設けて、木材を採伐することを許可す。其地區の廣狹年限の長短及び會社を如何なる組織方法にて設立し。並に一切の

協同規約は、別に詳細は合議して定むべし。總べて日清兩國とも株主の利權は共に均一ならんことを欲す。

三 本紙に句讀反り點送假名を附し別紙に解釋すべし。

奉和聖製暮春送朝集使歸郡應制

王 維

萬國仰宗周。衣冠拜冕旒。玉乘迎大客。金節送諸侯。祖席傾三省。褰帷向九州。楊花飛上路。槐色蔭通溝。來預鈞天樂。歸分漢主憂。宸章類河漢。垂象滿中州。(唐詩選)

(語釋)

朝集使とは、外即ち郡國より入りて朝班に與るをいふ。と綱鑑にある。○宗周。

周は后稷から文武に至る皆關中に都す、號して宗周となす。唐朝を周に比したのである。○冕旒は天子を指す。禮記に天子の冕は十二旒とある。○玉乘は天子の乘輿。○大客は諸侯をいふ。○金節は使節に分つ通行券。○祖席は饌別の寓席。○三省は侍中、中書、門下をいふ。○褰帷は車の日覆をかへげること。○鈞天の樂は天子の樂。○宸章は天子の御製をいふ。

(意解) これは、暮春に刺史等の參朝したる者が、事終つてまた各任地へ歸るを送つた作である。應制は天子の御製に應じて作られたといふ譯である。○王維は仲鷹等と親

密であつた有名の詩人である。

大意は、四方萬國は此唐朝を仰ぎ、萬國の百官は表冠を正して天子を拜する、天子は玉乘に召して、今日の大客を出で迎へ、やがてまた金節を授けて諸侯を送られる。其饌別の宴席には、三省の官人は皆列席する、刺史等は意氣揚々として、車の日覆を褰げて九州の各任地に向ふ。折しも暮春のこととして、楊花は禁中の大路に飛び散り、槐の色は御溝に蔭を映して居る。郡より來つて朝廷に入りては天子の樂を預り聽き、又郡に歸つては天子の憂ふる所を憂として國を治める、天子の宸章は天の河に類して居る、何となれば、河漢の中天に基布して海内之を仰ぐが如く、各使臣が宸章を奉持し歸り、其の盛徳を仰ぐであらう。となり。

解釋及讀方 (第二種志願者の分)

左は本紙に句讀反り點送り假名を附し別紙に解釋すべし。

一 孟子曰。欲貴者。人之同心也。人有貴於己者弗思耳。人所貴者。非良貴也。趙孟之所貴。趙孟能賤之。詩云。既醉以酒。既飽以德。言飽仁義也。所以不願人之膏粱之味也。令聞廣譽施於身。所以不願人之文繡也。(孟子)

(語釋) 良貴。天然に貴き者をいふ。○貴於已者。天爵あるをいふ。

(意解) 孟子の曰はるゝには、貴を欲するは、人々皆望む所である。但し人々天爵の貴きものがあることを思はない、即ち己に在るものを捨て、人に在る物を求めるとは如何なるもので有らう。趙孟は晋の卿であるが、人に爵祿を與へて貴からしめ、又能く之を奪つて賤しからしむ。斯の如く恃むに足らない爵祿を人は貴ぶので、眞の良貴でない。良貴は人に左右せられるものでない。かの良貴の貴ぶべきは、詩經の大雅既醉の詩にも云つてある通り、既に醉ふに酒を以てし、既に飽くに徳を以てすと、言は仁義に飽くといふことである。仁義が中に充足すれば、言ふに言はれぬ味があるから、人の賞美する肥肉美穀の味を願はない譯である。善き聞えや廣き名譽が、身に施せば、自然に威光が出て來るから、飾縫のある立派な錦の衣服を願はない譯である。即ち身に徳が備り、令聞名譽が著はるゝは、良貴といふもので、是が人の最も貴ぶべき所である。

左は本紙に句讀反り點送り假名を附し傍線を施したる處のみを別紙に解釋すべし。
二 某啓。示及新詩。皆有遠別惘然之意。雖兄之愛我厚。然僕本以鐵心石腸待公。何乃爾

耶。吾儕雖老且窮。而道理貫心肝。忠義填骨髓。直須談笑於死生之際。若見僕困窮便相於邑。則與不學道者不大相遠矣。兄造道深。中心不爾。出於相好之篤而已。然朋友之義。專務規諫。輒以狂言廣兄之意爾。僕雖懷坎壈於時。遇事有可尊主澤民者。便忘軀爲之。禍福得喪付與造物。非兄僕豈發此。看訖使火之。不知者以爲詬病也。(八家文)

(解釋) 吾儕云々。於邑は煩悶愁苦の意。吾輩は年取つて、その上困窮はして居るが道理といふものは心肝を貫き、忠義の心は骨髓を填めて居るから、たゞ國家の大事に遇うて、死ぬか生きるかといふ際に、談笑すべきである。若し僕の困窮してる様を見て、愁ひ心配する様では、道を學ばない者と大に遠くなく譯である。○坎壈は志を得ざる貌○詬病は禮記儒行篇に、常以儒相詬病と、註に詬病は猶耻辱也とあり。

石川鴻齋著 精註唐宋八家文讀本
服那富三郎著 唐宋八家文摘解

左は本紙に句讀反り點送り假名を附し別紙に解釋すべし。

三 封大夫破播仙凱歌
漢將承恩西破戎。捷書先奏未央宮。天子預開麟閣待。祇今誰數貳師功。(唐詩選)

(語釋) 開麟閣。漢土では大功勞のある者は、其畫像を麒麟閣に留るといふことがあるから、かく云ふのである。○貳師功。漢の貳師將軍が、胡を破りし功をいふ。

(意解) 漢將が天子の恩命を受けて、西の方戎を打破り、戰捷を奏する書を先づ未央宮に持ち行きて天子に奏聞する。天子に於かせられては、豫め此事を察せられ、麒麟閣を開いて御待受けなされて居る。封大夫の戒を破りし功は、大したものであるから、祇今では、漢の將軍貳師の功も數ふるに足らない。となり。

第二十回國語漢文科豫備試驗

(明治卅九年八月)

設問

- 一 左の語につきて音韻の變化を變明せよ。
- なんくんとす。とほたうみ。いはゆる。
 なんくとす(垂)。なりなんとすのりといふ良行音が、同じ齒音に屬する奈行音に同化されて。んとなつたのである。
 とほたふみ(遠江)。とほつあふみのつが、同行音のたに變じあは母音で省かれたものである。
- いはゆる(所謂)。いはるゝの轉じた語で、現今「忍ばる」といふを古は「忍ばゆ」といつた。この例は澤山ある。
- 二 左の例につきて動詞と形容詞との區別を説明せよ。
- 有り 無し 静かなり
- 今までの文法家は、(有り)は動詞、(無し)は形容詞、(静かなり)は形容動詞というて

をるが、是は大に研究を要すると思ふ。(有り)はその活用様が動詞に似てをるから動詞、(無し)はク、シ、キ、ケレと活ぐから形容詞といふのであるが、是は内容性質を見ない論で、甚だ不當の様に思はれる。有無は相對したもので同格たるべきものである。(静かなり)は以前の文法家は二語と見たのであるが、西洋文法が開けてから、形容動詞といふ名稱をつけたのである。是は「静かにあり」の約言で、(有り)といふ語がついてをるから、かく名稱を附したもので有らう。それ故に、余は活用の如何に拘はらず、動作を表はさぬ語は動詞といはぬ考である。

三 抒情詩。叙動詩。戯曲詩の區別如何

一、抒情詩。自分の感想をあらはす韻文で、リリツクの譯語である。神佛の讚歌、悲哀歌、軍歌等その内容形式により種類が多い。専ら作者の主觀の情を主とするから、主觀詩の稱がある。我國古來の短歌は多くはそれである。

二、叙事詩。事實のまゝを述べ記した韻文で、エピックの譯語、作者は正史上傳説上の事蹟を叙述する丈で、只形式の上に技巧を求めのみで、自分の感想を加へないのを本旨とする。平家物語などは、一種の叙事詩といはれでをる。

三、戯曲詩。英語ドラマ、又譯して劇詩ともいふ。劇に演ずるを本旨とする詩で、叙事に抒情を兼ね、客觀的で且主觀的なものを本領とする。

四 弘法大師、日蓮上人の時代に於ける國文學の狀況如何。

弘法大師の出たのは弘仁時代で、奈良朝時代に盛であつた和歌は、その影を潜め、漢文學ばかり勢を逞しうするやうになつた。是には種々原因があるであらうが、唐朝との交通が頻繁で、彼の文化に眩惑されたのも一つで、又空海のやうな高僧が、入唐して佛教研究の傍、漢文を學ばれて、世説王昌齡集、同詩格、貞元英傑、六言詩などいふ詩文集を持歸つた事は、大なる感化を興へたであらう。又平城、嵯峨、淳和の三帝に皆漢詩漢文を御好みなされて、之を奨励なされた事は、有力な原因と思はれる。勅によつて凌雲集、文華秀麗集、經國集などいふ詩集が撰せられた程であるから、國文學は只宣命等に寥々たる光を止める丈で、殆んど無しというてよい位であつたが、和歌も長歌が衰へて、追々短歌の盛になる兆をあらはし、假名の弘通に連れて物語文も漸く世に出でんとするに至つたのである。

日蓮上人の時代は、北條時頼時宗の執權時代で、武威天下を壓したから、文學もすべ

て男性的で、平安朝時代に全盛を極めた物語文は漸く影をかくし、保元、平治物語や源平盛衰記、平家物語のやうな戦記類盛に世に出で、十訓抄のやうな教訓的のもの、及び阿佛尼の紀行文十六夜日記のやうな種類の異つた作が著はれるやうになつた。和歌の方面は如何といふに、續後撰、續古今續拾遺のやうな勅撰集も出たが、追々師範家といふ者を生じて、やれ秘傳のやれ禁制のと八釜しい規則を設けて、歌人を束縛したから、少しも進境を見ることは出来なかつた。概してこの時代の文學は、佛教の臭味を含み、隱世的の語氣を帯びて居るが、さすがに武人跋扈の世の中であるから、剛健峭拔の風に傾いてをる。又東鏡式目等の擬似漢文は益發達して、徳川時代の書翰文を産み出すやうになつた。平安朝の貴族的であつた文學は、此時代より、追々平民的に傾いて來たことも、注意すべ點である。

五

詩の古體と近體との區別を説明せよ。
律詩の起りは、六朝に始つて、唐代に至り大成したものであるから、之を近體と稱する。五言七言の區別があつて、その中又律と排律とがある。この近體に對して、その以前に多く作られたのを古體と稱する。同じく五言七言の別

が有つて、又長古、短古と別れてをる。五言古詩は蘇武李陵に始まり、七言古詩は漢武柏梁の聯句から起つたものだ。

六

六書の區別及其實例を示せ。
○大體のことを知るには、詩法纂論(清平飲山著)が簡便である。

形象	物體の形狀を描けるもの 日月山川	形聲	形と聲とをあらはすもの、 河、江、鶴
指事	數や方向等を符號にて示す 一、二、三、上、下	轉注	文字の義を轉じて他の意に注ぐ(タク)支度、 度(下)尺、度轉じて
會意	二個の文字を結合して其意をとる明、信、武	假借	唯音の相當より假りて通用す 焉(モー)鳥名

七 左の人々を時代の順に排列せよ。
許慎著 說文解字 (段玉裁の註をよしとする)

- 駱賓王、 陳思王、 朱彝尊、 曹大家、 陸放翁、 李夢陽、 昭明太子、
- 謝靈運、 李翱、 宋景濂

菅大家、陳思王、謝靈運、昭明太子、駱賓王、李翱、陸放翁、
宋景濂、李夢陽、朱彝尊、

作 文

- 一、婚禮を祝ふ文
- 二、死亡を弔ふ文

國文漢譯

三 命もいらす名もいらす官位もいらぬ人は始末に困る人なり此の始末に困る人ならせば
艱難を共にして國家の大業を成し得られぬなり。(西郷南洲遺訓)

不惜生命、不欲名譽、不望官位者、難如何人也。然非如斯人、共艱難、成就國家之大
業、難矣。

(注意) 二種の受験者は設問第七作文第三に答ふるを要せず。

解 釋

一 掛卷も畏き天皇大御自皇軍をあともし賜ひて遠くもいでましあるは皇子達大將軍とし
ても言向賜へれば大臣達前つ君達いづれか仕へ奉らざらんまけのまに草臥戸といそみ
し仕へ賜へるなりざるを職の制定まりてよりは文官武官品わかれて三公納言皆文言におま

しませば遠く御軍を率ゐる賜ふことかけてもなく大將中將武官の長におはすれどこれはたや
んどとなき極にて猛きふるまひおはすべくもあらず源多卿の上表に臣族非將種門謝兵家
とある如く自然うま人は武き業にはうとくなりゆきて將種兵家は下にのみなん出來にける
これ上つ代ならむには何れか將種ならざらん誰かは兵家ならざらんこれなん官職の制度に
して骨の手ぶりの變れるものなり代々ふるまに藤原氏の勢彌増して御堂殿にいたりては
望月のみちにみち足らひにたらひて心のまにかりしかば御三條の帝をうれたみ賜へ
る御心よりして白河院院中に御政行はれ自ら將種兵家を召し賜ひしかば名の代とうつるべ
き齟齬始めてこゝにきざしにけり。

(解釋) あともひ。率ゐる意。言向。征服すること。前つ君。公卿、天皇の御前に仕
ふる人の意。まけのまけのまに草臥戸といそしむ仕へ。まけは任ずる意、草臥戸
は「山行かば草臥戸、海行かば水漬戸、大君のへにこそ死なぬ、のぞには死なし」とあ
る意で、こゝは任命するままに身命を惜まず仕へることをいふ。かけてもなく。少
しも無くといふに同じ。これはたやむことなき極にて云々。これはまた標貴い身の上
で、勇猛な振舞は出來ぬといふ意。うま人。身分よき人。骨の手ぶり。根本の様子と

いふこと○御堂殿。藤原道長をさす○望月の云々。望月は十五夜の月で、圓滿であるから、満ち足らひたる序語として持つて來たので、少しも不満足の事のない、極得意のさまを表せる文である○うれたみ。憂慮する意○名の代とうつるべき云々。將種兵家即ち武家といふ名が代と共に移りゆくべき端緒が、こゝに開かれたといふこと。

二 自然淘汰。萬有。人格。輕文學。純文學。刹那。一機軸を出す。中原の鹿誰が手に落

つ。自然淘汰。この自然界に生息する動植物中、その場所、境遇に適應し、種々の障礙に打

ち勝つ者は、生存繁殖し、然らざる者は、自然に絶滅することをいふ。

萬有。天地間の森羅萬象をいふ。

人格。意志鞏固で、道德上の諸徳を備へ、その行動公明正大なる者の稱。

輕文學。都々逸とか、端唄とかいふやうな、俗人の翫ぶべき文學のこと。

純文學。詩歌文章等の如く、純粹に文學を目的とするものをいふ。

刹那。梵語、極めて僅少な時間をいふ。

一機軸を出す。一種の異つた組立方法を作り出すこと。

中原の鹿誰が手に落つ。中原は中國といふこと、又天下の意とす。鹿は帝位に喩へる。史記に「奏失其鹿天下共逐之」とある。故に帝位は誰の手に歸するであらうの意であるが、轉じて何事にも勝利を得ることにいふ。本紙に句讀反り點送り假名を附し別紙に解釋すべし。

解釋

三 色厲而内荏。譬諸小人。其猶穿窬之盜也與。(論語)

(語釋) 厲は威嚴のあること○荏は柔弱柔ること○穿窬は壁を穿ち垣を踰ゆること。

(意解) 外貌を見ると、中々しつかりして居る様で、心中臆病で卑怯な者がある。之を小人に喩へると、常々竊盜などして、人の前では知らぬ顔をして居る者と同じで

甚だ恐むべき人であるとなり。

四 其言之作則爲之也難。(論語)

(解釋) 言ふことは易く行ふことは難し。の意をいはれたものである。人は凡て爲さ

んとする志が有るならば、其の必ず出来るか出来ぬかを考へて言ふときは、其の言ふ所を行ふことが出来る。始から必ず爲さんといふ考も無くして、漫に之を言ひて愧づ

る心の無いのは、其の言を實行することむつかしいことでは無いか。となり。

五 可以取。可以無取。取傷廉。可以與。可以無與。與傷惠。可以死。可以無死。死傷勇。

(孟子)

(解釋)

こゝに取つても宜しいやうな、又取つてはならぬ様な事が有る。かく疑しい時は、寧ろ取らぬ方がよい。若し取れば心の潔白を傷ふことになる。又此に、與へてもよい様な、與へてならぬ様なことが有つたなら、寧ろ與へぬ方がよい。若し與へると人を恵む道にかなはぬことになる。こゝに又事變起つたとせんに、生命を捨つべき場合とも思ふし、又死ぬまでも無き事とも思ふ。かゝる半信半疑の際には、寧ろ死せざる方がよい。若し死するときは眞の勇を失ふことになる。故に人は疑しきことはすべて控目にする方が過がない。といふことを戒められたのである。

六 夫曰婦徳。不必才明絶異也。婦言。不必辯口利辭也。婦容。不必顔色美麗也。婦功。不必功巧過人也。清閑貞靜。守節整齊。行己有恥。動靜有法。是謂婦徳。擇辭而説。不道

惡語。時然後言。不厭於人。是謂婦言。盥浣塵穢。服飾鮮潔。沐浴以時。身不垢辱。是謂婦容。專心紡績。不好戲笑。潔齊酒食。以奉賓客。是謂婦功。此四者。女之大徳。而不可

乏之者也。然爲之甚易。唯在存心耳。古人有言。仁遠乎哉。彼欲仁而仁斯至矣。此之謂也。

(賢母錄)

(解釋)

夫れ婦徳と曰ふのは、必ずしも才識明敏で、他に異つて居るのではない。婦言といふのは、必ずしも口が達者でうまいことを曰ふのではない。婦容とは、必ずしも容貌が好くて人を惱殺する様なのをいふのではない。婦功とは仕事に巧みなことが人並勝れて居る故ではない。一寸見た處では實にしとやかであるが、心はしつつかとして、能く節を守つて、萬事行届き、己の事を行ふに當つては、耻ちがましく控目にして、起居動作すべて極りがある。かやうな人を婦徳の有する者といふのである。辭を擇んでいひ、人の悪口をいはず、言ふべき時に際してはいひ、人に厭忌されないやうにする。是を婦言といふのである。汚穢な處は之を洗ひ浣ぎ、衣服類は清潔にし、時々湯に入つて身を清め垢付かぬやうにする。是を婦容といふ。専心績み紡ぎして家業に勤め、遊戯談笑に時を費さず、酒食を清めて賓客を禮遇する。是を婦功といふのである。此の四つの者は、婦女の至大な徳であつて、これが缺けてはならない。さうして之を爲すことは、極易いことである。唯平素こゝに心を置きさへすれば出来るので

ある。古人の言ふたことがある。仁は遠いか、仁といふ行ひは、聖人も難しとする處であるが、決してむづかしいものではない。我は仁を行はうと欲すれば、仁はすぐ身に至るものである。とあるのは之を謂ふのである。婦人の四徳といふのは、之と同じく、平素行はうとさへ心掛ければ出来るものである。となり。
本紙に句讀反り點送り假名を附すべし（解釋を要せず）

讀方

七 天下之患。莫大於不知其然而然者。拱手而待亂也。國家無大變革幾百年矣。天下有治平之名。而無治平之實。有可憂之勢。而無可憂之形。此其有未測者也。方今天下有水旱盜賊人民流離之禍。而咨嗟憤怨。常若不安其生。非有亂臣割據四分五裂之變。而休養生息。常若不足於用。非有權臣專制擅作威德之弊。而上下不交。君臣不親。非有四夷交侵邊鄙不寧之災。而中國皇々常有外憂。此臣所以大惑也。（八家文）
八 學部設矣。翰林院之必撤。勢也。然撤乎。則舊日諸大史無以為疏通計。留乎。則政界多一間官。即國家多一間費。惟派遣遊學。則不特間費可省而已。翰林之才具明敏。年力富強者。當得以他途願為疏通計。固宜爾爾。（申報所載派遣翰林遊學之利病觀一節）

同本試験 (明治四十年二月)

設問

一 小學校に於ける文法の教授案を示せ。

(新令)高等一學年教授案 時間一時間

(一) 題目。受身の助動詞。

(二) 教材。高等小學讀本卷六第三課

(三) 目的。る、らるの二助動詞が動詞に接する時は受身の意を表す事及其口語と差異あることを知らしむ。

(四) 教授

(1) 豫備 前時間に學びし第三課の概畧を問答し、次に老農と稱せらる。世に知られし。正七位に叙せられ、の意義を問ひ、次に本日は此のるらるに就いて教ふる旨を告ぐ。

(2) 教授 讀本を開かしめ、右の處を口語にて讀ましめ、一層詳密にその意義を説明

し、次に口語と對照せしむ。

(3) 應用。次の口語文を文語に改めしむ。

ナポレオンは諸外國の聯合軍の爲に撃退されてつゝに帝位からおとされてユルシカ島の東のエルバ島に流されました。

二 文法と修辭學との限界如何

(第十五回本試験設問(一)に説明し置きたれば省く)

三 左の書を解題せよ。

- 一、和字正濫抄。これは、契沖阿闍梨の著で、中世以降假名遣の紊亂したのを、或は四聲により、或は音の輕重によつて定められた定家假名遣などの説を正し、古書によつて、その誤謬たることを辯明し、歴史假名遣の根據を作つたものは、この正濫抄である。
- 一、和訓栞。谷川士清の著で、徳川時代三大著書の一に數へられる。徳川時代には、古言梯などいふ辭書も出たが、最整頓してゐるのは、この和訓栞と、石川雅望の雅言集覽である。集覽は雅言のみであるが、これはすべての語を集めてあるから、學者を裨益したことは尠くない。

一、悦目抄。藤原基俊の著で、假名遣の事を書いた最も古いものである。

一、玉霞。本居宣長の著で、歌と文章の二部に分けて、手爾遠波と用言の古意を説明し世人に歌でも文でも、古を模範とすべきことを示されたので、次の歌の意によつて題意をつけられたといふことである。

玉霞學の窓に音たて、驚かさばやさめぬ枕を

一、歌袋。富士谷御杖の著で、八卷ある。父成章が、七体七百首即ち和歌の七變遷を説いたものを、更に六運六則五体に詳述して、歌を歴史的に論評したもので、堂上家の説と古學派の説を折衷したものである。

四 朱陸學術の異同。

朱陸の異同を一言でいふと、朱子は格物致知、陸象山は良知良能説である。即ち朱子は理を究めて知を致し、自分の身に反求して、實を踐むを主とする。而して、敬に居るを工夫の要とした。象山は徳性を尊ぶを第一とした。まづ天の我に與ふる所以のもの、即大體が明かであれば、小なるもの、爲に奪はれない。徒に物の理を窮めるといふことはいかないといふにある。嘗て朱子と鷺湖に會して、學ぶ所を論辨し、又白鹿

五

洞では「君子小人義利に喩る」の章を講究したが、意見の合はない處が多かつた。

左の文を文章法の上より解剖せよ。

主部 說明語 客部
古者言之不出 耻 躬之不逮也。

説明、主部は、古者が主語で、言は客語、不出は説明語で一文の形式は備へて居るが此の文の附屬となつて名詞の格をなし、主語と見るべきものである。客部は、身は主語、不逮は説明語であるから、矢張名詞句で、客語の格をなして居るのである。

作文

高等女學校開校の祝辭

解釋

一 男も女もわろものはわづかにしれるかたのことをのこりなくみせつくさんと思へるこそいとをしけれ三史五經の道々しきかたをあきらかにさとりあかさんこそあいぎやうなからめなぞかは女といはんからに世にあることのおほやけわたくしにつけてむげにしらすいたらずしもあらんわざとならひまなばねどもすこしもかどあらん人の耳にも目にもとまる

ことしねんにおほかるべしさるまゝにはまんなをはしりがきてさるまじきとちの女ぶみになかばすぎてかきすぐめたるあなうたてこのかたのたをやかならましかばとみゆかし心にはさしもおもはざらめどおのづからこはしきこるによみなされなとしつことさらびたりこれは上らふの中にもおほかることぞかし。(源氏物語)

(解釋) すべて云々。男でも女でも、つまりぬ者は、僅か知つてをる事があると、それを残らず人に見せて、えらく思はれようとするが、それは實に慙むべき事であるなり。三史三經云々。史記、漢書、後漢書の如き歴史や、詩、書、禮、易、春秋のやうな經書のむつかしい道理を、充分さとり明らめるといふ事は、女として實に愛嬌の無い事であらう。○などかは云々。このなとかはは、あらんにかゝつて反語をなす。女だからと云つて、世間にある公私の事につけて、少しも知らない、通じないといふ事があらうか、そんな事はない筈である。○わざと云々。わざと學習しなくとも、少し才智ある女は、常に耳にきき、目にも止まること、自然多からうとなり。○さるからに云々。世間の事にも通達し、學問も有る處から、漢字を草書に書きなし、さはあるまじき女仲間への文に、過半漢字を交せて、物柔かに書くべき筈のものを、書きすぐめ

などする女が間々あるが、皆自分の才學だてするので、假名にても用足るべきに。あゝ無益な事である。とうたてく感せられる。かゝる人が穩か得有つたならば、さぞ奥ゆかしからうと思はれる。○こゝちには云々。自分の心持には、さうも思ふまいが、自然にキツ／＼した音によまれなどして、何となく態とらしい。かやうな方は、上等の人の中にも中々多いものである。紫式部の時代には、才學ある女多く、上臈の中にもかやうの人有りし故、かく評したのであらう。

萩原廣道著 源氏物語評釋

北村季吟著 源氏物語湖月抄

二 秋吹く風に耳欬て、故郷の鱸の膾思ひ出でけむ人こそげにさる事とは覺ゆれ岸の額に老の浪をたゝみて直なる針に王公の位を釣り得し翁はうらやましくもあらずや我はたゞ世を捨舟に棹して山陰のしづけく水草の清からむあたり息の緒のかぎり心を遣りてうへなき樂とはなしぬべきぞかし。(泊泊文藻)

(解釋) 故郷の鱸。晋書張籍傳に「齊王辟爲大司馬東曹掾。因秋風起。思吳中菰菜蓴羹鱸魚膾。曰。人生貴得適意。何爲羈宦數千里以要名爵乎。送命駕歸」とある是であ

る○岸の額云々は大公望の武王に知られた故事をいふので、岸の額に老の波をたゝむとは、呂尙は老年に至るまで不遇で、涓濱に毎日釣を垂れ、悠々時の至るを待つて居た。といふ事であるから、老年になつたことを形容したのである。毎日直なる針で釣をして居た處、偶々武王に知られて、王公の待遇を受けた處の大公望は、實に羨しいではないかとなり○我はたゞ云々。世を捨舟に棹してとは、たゞ世を捨て、といふ事を形容したに過ぎぬ。我は唯世捨人となつて、山陰の靜かな蘊藻の清き邊に、命のあらむかぎり心を慰めて、この上なき樂としたい。と思ふとなり。

解釋及讀方 (第一種受験者の分)

一 詩云。迨天之未陰兩。徹彼桑土綢繆牖戶。今此下民、或敢侮予。孔子曰。爲此詩者。其知道乎。能治其國家。誰敢侮之。今國家閑暇。及是時。般樂怠敖。是自求禍也。禍福無不自己求之者。詩云。永言配命。自求多福。太甲曰。天作孽猶可違。自作孽不可活。此之謂也。(孟子)

(語釋) 詩は幽風鷓鴣の篇なり○迨は及也○徹は取に全じ○桑土の土は杜の略で、桑皮をいふ○綢繆は纏綿補綴すること○牖戶は出入口○般は盤旋する也○敖は傲遊する

こと○次の詩は大雅文王の篇○配は當る也○太甲は尙書の篇名○孽は禍也○遠は避け
る又は去るの意。

(意解) 詩經の幽風鴟鵂の詩に云ふてあるには鴟鵂といふ鳥は。天がまだ雨降ら
ない内に、彼の桑皮を取つて、自分の巢の出入口を纏綿補綴して、もう少しも雨の害
を受けない様にして曰ふには、最早此の下民は、敢へて誰も予を侮り害する者は有
まい」とあるが、孔子は評して、此の詩を作つた者は、能く道を知つて居る者であら
う。國家無事の時に方つて、能く賢能を登用し、刑政を正して、國家を治めたならば、
誰が敢へて之を侮る者があらうや。閑暇の時に及んで、徒に怠慢放遊を事とするは、
是自ら禍を求めるといふものである。それで有るから、禍福といふものは、自分から
之を求めるので、外より來るものでない。又大雅文王の詩にも、永く天命によつて善
道を行ひ、自ら多幸多福を求むとあり、又書經の太甲には天の作せる禍は、避くべき
工夫も時にあるが、自分の作した禍は遁れる事は出來ないとある。是禍は外より來る
ものでない、自ら招くものであるといふことを謂つたのである。

送李少府貶峽中王少府長沙

高適

二 嗟君此別意何如。駐馬銜杯向謫居。巫峽啼猿數行淚。衡陽歸雁幾封書。青楓江上秋天
遠。白帝城邊古木疎。聖代即今多雨露。暫時分手莫躊躇。(唐詩選)

(解釋) 兩人が貶謫されて別々の處へ行くの一首を以て送るのである。

嗚呼兩君は、此度貶謫されて行くこの別れの心持は如何ですか。今別れに臨んで、兩
君は馬を駐めて別杯を飲みかはされて、各謫居に行かれる心中思ひやられる。第一に
李君の方は、峽中へ行かれることで有るから、彼の巫峽の邊で、鳴き叫ぶ猿の聲を聞
かれたならば、斷腸の思に堪へないで、數行の涙を注がれるで有らう。又王君の行か
れる方は、南方衡山のあたりと申すことで有るから、此山から向へは雁も行かぬとい
ふ處で有るから、雁の歸るときに手紙を寄せられることもむつかしからう。王君の行
かれる處にある青楓江の上を遙に望まれたならば、秋の天は遠く晴れ渡つて、都戀し
い感が起るであらう。又李君の行かれる白帝城の邊は、古木が疎に立つてあたり蕭條
たる有様を見たならば、嘸物悲しい感じがするであらう。併しながら兩君安んぜられ
よ、今の代は如何なる世である。聰明の天子上に君臨し給ふ聖代である。それ故に只
今は雨露の如く恩恵を施されることが多い。君達はかく貶謫の禍に逢うても、暫時は

を別つて御別れするだけで、程なく赦免されて都に歸るも近い内であらう、それ故に心配して躊躇するには及ばぬ。となり。

三 昔者。先王之爲天下。必使天下欣々然常有無窮之心。力行不倦。而無自棄之意。夫惟自棄之人。則其爲惡也。甚毒而不可解。是以聖人畏之。設爲高位重祿。以待能者。使天下皆得踴躍。自奮拔擢。而來。惟其才之不逮。力之不足。是以終不能至於其間。而非聖人塞其門絕其塗也。夫然。故一介之賤吏。閭閻之匹夫。莫不奔走於善。至於老死而不知休息。此聖人以術驅之也。(八家文)

(注意) 本紙に句讀反り點送り假名を附すべし。

解釋及讀方 (第二種受験者の分)

一 心猶首面也。是以甚致飾焉。而一旦不修。則塵垢穢之。心一朝不思善。則邪惡入之。咸知飾其面。不修其心。惑矣。夫面之不飾。愚者謂之醜。心之不修。賢者謂之惡。愚者謂之醜猶可。賢者謂之惡將何容焉。故攬照拭面。則其心之潔也。傅粉則思其心之和也。加粉則其心之鮮也。澤髮其心之潤也。用櫛則思其心之理也。立髻則思其心之正也。攝髮則思其心整也。(蔡邕女訓)

(注意) 本紙に句讀反り點送り假名を附し別紙に解釋をなすべし。

(語釋) 攬照。昭は鏡なり。鏡を取つて顔面を拭ふなり。〇傅は音「フ」で附に同じ。〇澤

髮の澤は水油を用ひて之を潤すなり。〇攝髮は鬢を整へ治める也。

(意解) 此の文は、婦女子の心掛を書いたものである。人の心は、丁度顔面のやうなものである。是であるから、之を飾ることが甚だ必要である。顔面は、一度修めなければ、塵や垢が之を穢す。一度善を思はない時は、邪惡が之に入つてよこしまな心となる。皆人は顔面を修飾することは知つて居るが、其の心を修める者は少ない。これは甚だ惑である。若し人が顔面を飾らない、愚者でも之を醜といふ。若し心を修めなければ、賢者は之を惡といふ。愚者の之を醜といふはまだよいが、賢者に惡といはれた時には、どうして世の中に容れられよう。誠につらいことである。

故に、婦女子は鏡に對して顔面を拭ひ、美麗にするときは、其の心の潔白を思ひ、白粉をつけるときは、それが顔になじむ如く、其の心の和することを思ひ、白粉を加へるときは、其の心の鮮やかなことを思ひ、頭髮に油などをつけて艶あるやうにしたときは、其の心の潤ひあることを思ひ、櫛を用ひて髪を梳るときは、其の心の筋目立つ

ことを思ひ、髻を立てるときは、其の心の正しからむことを思ひ、髻を撮めるときは其の心の整理することを思ふ。此の如く心掛けてこそ、婦女子は良妻賢母とすることが出来るのである。となり。

遊洞庭湖

二 洞庭西望楚江分。水盡南天不見雲。日落長沙秋色遠。不知何處弔湘君。(唐詩選)

(語釋) 湘君。堯の二女で、舜の妻である。舜南巡して蒼梧の野に崩じたる時、悲哀の情に堪へず、之を慕うて、洞庭湖邊に至り崩せられたので、廟が立つて居るとのことである。

(意解) 洞庭の湖上から、西の方を望むと、楚江の水が落込んで来るのが、白くありくと見える。南の方は、浩蕩渺々として、水の盡くる處、雲のかゝる山も見えない。日も西の方に没して、長沙の邊は遠く秋色を呈して、何となく悲しく感せられる。暮色蒼然として、方角も分らぬから、湘君の廟に謁して之を弔ふことも出来ぬとなり。

三 第一種志願者の三問に同じ。

第二十一回國語漢文科豫備試験

(明治四十年八月)

設問

一 左の各項の書名を列記せよ。

(イ) 六國史 (ロ) 三代集 (ハ) 四鏡 (ニ) 春秋三傳 (ホ) 六經。

イ、日本書紀、續日本紀、日本續紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄。

ロ、古今集、後撰集、拾遺集。

ハ、大鏡、水鏡、今鏡、増鏡。

ニ、左氏傳、公羊傳、穀梁傳。

ホ、詩、書、易、春秋、樂(樂經亡びてより周禮禮記を加ふ)

二 延喜天曆時代の國文の状況如何。

前の弘仁時代は、漢詩漢文の隆盛な時代で、白氏文集や文選などは、非常に貴ばれたものだが、この時代は自覺の時代ともいふべき時で、前期の反動として、和歌和文が段々頭を擡げて來たのである。古今集の撰者として、有名な紀貫之は、古今集と大井

川行幸和歌とに、純粹の國文を書で序いた。この見識は、まづこの時代の文學者として見上げたものだ。併し二文とも漢文學の影響を受けて、四六駢儷体に似て、對句を多く使用して、句の彫琢にのみ苦心して、生氣に乏しい。彼の手になつ土佐日記は土佐の任滿ちて、京に歸るまでの日記で、婦人の手に托して書いたもので、輕妙自在の點は確にある。それであるから、後世大に珍重される。兔に角紀行文の祖であるから後世の文學に影響したことは少しでない。この時代の小説で、今日残つてをるものは宇津保、落窪の二書で、男女の戀愛を主として書いたもので、當時禰神家の風儀、追々亂れたことを暴露してをる。尤もこの二書はその外因果の理を含めてある。この外に、住吉大和物語がある。ことに大和は、伊勢と併稱され、和歌が主で、文は客である。兔に角、漢文を壓して、國文全盛の時代を産み出した功は、當時の文人その人である。

三 左の事項につき參考すべき書目をあげよ。

(イ) 皇圖の御系圖 (ロ) 徳川時代の女子の服装。

(イ) 皇胤紹運錄

(ロ) 歴世服飾考 近世女装考

四 左の文を章法の上より解剖せよ。

(イ) 主語 知らざるを 補足語 知らすと 說明語 せよ 主語 是れ(ガ) 補足語 知れる(トイフモノ) 說明語 なり

(ロ) 物言へば唇寒し秋の風。

位置の轉倒あれば左の如く直して解剖す。

形容詞的修飾語 秋の風吹く時 客語 物(ヲ) 說明語 言へば 主語 唇寒し

五 清初學術の狀況如何。

清初は、愛親覺羅氏滿洲の蠻族から起つて、明朝を倒して建てた國であるから、始は文學といふべき程のものはない。太祖の時に、蒙古字で滿語に合せて、滿文を創立して、中國に頒行した。又漢書を翻譯させたり、その六年には諸大臣に諭して、八歳以上の子弟には、必ず書を読ませたりして、大に文教を興し、儒術を尊ぶの意をあらはした。その後天下に詔して、遺書を購求し、三國演義を翻譯せしめて、諸臣に頒ち、此の如くして、不執を企てる暇無からしめようとした。又明史を修め、佩文韻府淵鑑

類 函康熙字典を編纂させた。是等の書の撰述されると同時に、清朝特有の考證學が勃興した。この派の學者には、顧炎武、黃宗義、朱彝尊、毛奇齡、閻若據等は有名なものである。古文には、侯方域、汪琬苞等あり、詩人には錢謙益、吳偉業、宋琬、施潤章、王士禛があつて、一代の文運こゝに至つて、大に光輝を發するに至つたのである。

六 支那歴代の國號を時代に記せ。

夏、殷、周、秦、前漢、後漢、王爾、晋、南北朝、隋、唐、五代、宋、元、明、清、

作文

一 新聞紙 (普通文)

國文漢譯

二 帝國教育會は二十八日を以て總理、内務、文部の三大臣に對し大要「地方官々制改正の曉に於て教育行政の事務は特に一部を置き高等官を以て部長とし且つ該高等官は特別任用令を設け斯道に通曉せるものを採用相成りたし」との意味にて一篇の建議書を提出せり

(新聞雜報)

二十八日帝國教育會、呈建議書總理内務文部三省大臣、畧曰、地方官制更革之日、請特置一部、以高等官爲其長、以任教育行政、且設特別任用令、採用通曉斯道者、以爲該長官。

國語

一 心も知らぬ人はつゆ参りよる人だになきにきのふ二位の中將殿のまわり給へるだにあやしとおもふに又今日かくおびたしく賀茂詣などのやうに御さきのおともおどろくしう響きてまゐらせ給へることいかなる事ぞとあきるゝにすこしよろしき程のものは御匣殿の御事申させ給ふなめりとおもふはさも似つかわしやむげにおもひやりなききはものは又わが心にかゝるまゝに内のいかにおはしますぞなとまで心さわぎしあへりけるこそあさましうゆゝしけれ (大鏡)

(語解) 御匣殿。貞觀殿の一名、御服など裁縫する所で、然るべき大臣の女のなる職で、其長官を別當といふのである。後世は單に長官その人の名になつた。

(意釋) こゝは、三條院の御子で、後一條帝の東宮に立たれた敦明親王が、三條院崩御の後、密かに心を能信卿に打明けて、東宮を辭し申された事を書いた一條である。

二

心も知らぬ云々。その譯も知らない人は、常々道長の權威を恐れて、少しも東宮に参り寄る人さへ無いのに、さのふ二位中納言能信卿の思掛けず参つたさへ不思議に思つたに、又今日はかく賀茂詣のやうに、大層人拂ひする聲もおそろしく響かせて、御堂殿の参りなされたのを、如何なる譯であらう。と驚きあきれてをるにと也。○少しよろしき程のものは云々。少し世間の事情を知つてをる程の者は、道長公の御女、御匣殿を東宮に納れる噂が有つたから、これはきつと、この事を申上げなさるで有らう。と思ふは、まづ尤な事と思はれるよとなり。○むげに云々。極考の無い分際の者は、自分の氣にかゝる處から、是は天皇に何かお變りでも有りはせんかとまで、心を騒がせ合つたのは、實にあさましくあきれる事であるとなり。

(イ) わくらははに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ。

この歌は古今集雜下に「田村の御時に事にあたりて津の國のすまといふ處にこもり侍りけるに宮の内に侍りける人に遣しける」行平と詞書がある。

(語釋) わくらはは。タマサカの意である。夏木立の中に紅葉したのがあると、これももわくらははといふが、これも同じ意に落つるのである。○藻しほ垂れつゝ。藻鹽とは、

海藻に幾度も汐水を注ぎかけて、鹽分を多く含ませ、これを焼きて水に溶かし、其上澄を煮つめて鹽を製するので、之を藻鹽焼くなどいふ。さて鹽垂れるは、常に潮にぬれて水の乾かないことにいへど、轉じて涙に袖のぬれること、歎きに沈む意となつた。

(意解) さういふ人もあるまいが、若したまさかに、私の事を聞く人が有つたならば須磨の浦に、憂に沈みながら、詫しく暮してをる。と答へてくれい」といふ意で、須磨の浦は海邊であるから、藻鹽垂れつゝが能くきくのである。

(ロ) 甲斐が根をさやにも見しがけしれなく横をりふせるさやの中山。

(語釋) さやにも見しが。さやかに見たいものちやの意。○けしれなく。心無くといふこと。○横をり伏せる。横たはり伏せるなり。

(意解) これも古今集に「かひうた」とある地方歌である。甲斐の山々をはつきりと見たいものであるに、心なくも意地わるく、さやの中山が、横たはり伏して居つて、見る事が出来ぬよとなり。

(ハ) 紫の一本故に武藏野の草はみなながらあはれとを見る。

(語釋) 紫の一もと。紫草といつて、昔から武藏野に生ずる草がある。紫の染料として最も美しいといふことである。〇みながら。皆ながらで悉皆の意。
(意解) 紫草といふ紫の染料として最もよい草が、昔から武藏野にはひてをるが、その一本の故で、武藏野の草は悉皆ゆかしく見えるとなり。我が思ふ人ひとりの故に、ゆかりの者までも、愛らしく思はれる。といふ意の譬喩である。と説く者もある。或は然らん。

加茂真淵著 古今集打聞 十九冊

本居宣長著 古今集遠鏡 六冊

香川景樹著 古今集正義 四冊

金子元臣著 古今集評釋 五冊 明治書院發行

北村季吟著 八代集抄の中 二冊 六合館發行

右の書中最も平易に俗言で解釋したのは、遠鏡で、初心の者には至極よいが、少しく素養のある人には、金子氏の評釋を推す。内容外形の兩方面から、批評解説してあるから、最も明快を感じる。八代集を悉皆求めようとするなら、八代集抄を求めるがよい。

漢文

三 君子之道。辟如行遠必自邇。辟如登高必自卑。詩曰。妻子好合。如鼓琴瑟。兄弟既翕。和樂且耽。宜爾室家。樂爾妻帑。子曰父母其順矣乎。(中庸)

(語釋) 辟は譬に同じ。〇耽は樂也。〇帑は子孫をいふ。〇順は和順するなり。

(意解) 君子には有位の君子と、有徳の君子とあるが、こゝは、小人に對した有徳の君子を指すのである。そこで、君子の道といふものは、順序がある。譬へば、遠方へ行くには必ず近い處から歩を起すが如く、又高きに登るには卑い處からするやうに、凡て卑近な灑掃應對等の事より始めて、性を盡し命に至るのである。それで有るから詩の小雅棠棣の篇にも「妻子の情好契合することは、琴瑟を鼓するが如く、兄弟は友愛の道を互に盡し仲よく樂しむ。是の如くなれば、爾の室家に宜しく、一家よく治り又妻子を樂ましめる」とある。夫子此の詩を誦し、之を贊して曰く、妻子が和合しなければ、兄弟は決して仲善くなることなく、父母の愛を貽すものである。能く妻子和合し、兄弟和睦しなければ、父母は安樂にして順ならざることはない。といはれた。是

に由て之を觀ると、君子たるの道は、卑近より遠きに及ばすべからざるである。

太田錦城著 中庸原解

四

孟子曰。子路人告之以有過則喜。禹聞善言則拜。大舜有大焉。善與人同。舍己從人。樂取於人以爲善。自耕稼陶漁。以至爲帝。無非取於人者。取諸人以爲善。是與人爲善者也。故君子莫大乎與人爲善。(孟子)

(語釋) 舍は捨に同じ。諸は之乎又は之於に同じ。

(意解) 孟子の曰ふに、昔孔子の弟子の子路といふ人は、自ら修めるに勇なる人で、人が之に告げるに其の過あることを以てすると、欣然として喜んで之を改めたといふことである。古人の善をなすを樂しむこと此の通りである。又禹といふ人は、子路よりはまた善を樂む誠のある人で、一度善言を聞けば、己を屈して之を拜受し、己に裨益あるは勿論、國家に對しても益あることを樂んだのであるが、大舜に至つては、子路や禹よりもつと大なるものがある。善く人と同じうするといふて、人の善は己の善、己の善は人の善で、天下の公善を認めて、己の私を認めない。故に己未だ善をなすことが有れば、己を捨て、人に從ひ、人が益をなすことが有れば、人の善を取つて

己の善となすことを樂む。人と同じうするといふのは是である。舜は一時のみでなく何時でもさうで、歷山に耕し河濱に陶し雷澤に漁する時より、堯の禪りを受けて天子となるまで、人に善を取つて之を爲すを樂しむでないのはない。之を人に取つて善をなせば、己に善あれば之を人に勧め、人に善あれば之を取つて己の善となす。かやうにすれば、我も人も善に善に進む譯であるから、是人と善をなす者である。故に君子たる者は、人と善を爲すを樂むより大なることは無いのである。故に善を樂むの極を論ずる者は、必ず大舜を以て歸となすは、實に尤な譯である。

五 奉天距京較近。爲吉江兩省根本地。現各幹路枝路皆以該省城爲樞紐。總督應建駐署於奉天。以便控制。吉江兩省應各建行署。以符三省各建行台之旨。俾得隨時周歷商同三省巡撫辦理外交內治一切重要事務。三省巡撫亦可隨時前赴鄰省會商整頓。及互關涉各事。並周巡屬境以密考查。(東三省督撫奏邊疆三省官制摺一節) 第一種受驗者の分

五 鄧陽爲大將軍時。邊軍多事。鄧陽欲捨涼州併力北邊。郎中虞詡以爲不可。曰關西出將。關東出相。烈士武夫多出涼州。衆皆從詡議。陽惡詡欲陷之。會朝歌賊攻殺長吏。州郡不能禁。以詡以朝歌長。故舊皆吊之。詡曰。不遇盤根錯節。無以別利器。及到官。募壯士。攻

劫者爲上。傷人偷盜者次之。壯得百餘人。使入賊中。誘令劫掠。伏兵殺數百人。又潛遣貧人能縫者。備作賊衣。以綵線縫其裾。有出市里者。輒禽之。賊駭散。縣境皆平。(十八史略)

(第二種受験者の分)

同本試験

(明治四十一年二月)

設問

一 歌論に關する書數種を擧げよ。

公任の新撰髓腦。能因の歌枕。俊賴の山木髓腦。基俊の悅目抄。仲實の綺語抄。清輔の奥儀抄。袋草子。顯昭の袖中抄。俊成の古來風体抄。定家の詠歌大概。順徳上皇の八雲御抄。在滿の國歌八論。眞淵の新學び。景樹の新學異見。宣長の石上私淑言。篤胤の歌道大意。守部の長短歌撰格。

二 左の人々の語學上の事蹟を述べよ。

富士谷成章。

成章は京都の人で、文運圖説、かさし抄三冊、あゆひ抄六冊の著が有つて、語學上に

貢献した事は少くない。成章は、言語をかさし、よそひ、あゆひ、名の四種に分類した。その内右の二抄はあるが、装抄は傳はらない。挿頭抄には代名詞の一部と副詞、感歎詞、接續詞等を含んでゐる。脚結抄の一卷に於いて、言語を名詞、動詞、手爾波等として分類を試みて居る所は、成章の卓見であらう。而してこの脚結抄には、手爾波の研究がある。それと共に手爾波の變遷を六期に分けて研究してゐる。語學に對しては、非凡の考を持つて居つたのである。不幸短命で早く亡くなられたのは惜しむべきことである。

本居春庭。

我國語學の研究は、多く手爾遠波の研究に止つて居つたが、宣長が出て動詞の活用一指を染め、御國詞活用抄を著して、活用を論じたが、春庭は父の業を繼いで、専心語學の研究に従事し、遂に「詞の八衢」を著して、活用の法則を大成し、又「詞の通路」を著して、動詞の自他を研究したのである。併し「八衢」は中々むつかしいので、八衢學者といふ者が出來て、大に研究され、富樫廣蔭の踏分。足代弘訓の補翼。中島廣足の補遺など、澤山これに關する著書が出た。

鶴峰^{シゲノブ}戊申。

初めて和蘭の文法に則り、日本文典を著して、語學新書と名つけた。日本の語法を九品九格に別つて、大に研究したが、何しろ始めての研究であるから、誤謬の點が少なくない様である。兎に角、名詞より始めて手爾遠波まで纏つた日本文典の嚆矢であるから、その效は没することは出来ぬ。

中島廣足。

この人は肥後熊本の産で、別に語學上に關して新説はない様であるが、先輩の著書の増補に力を盡した功は中々ある。即ち玉の緒を増補して詞の王緒補遺、八衢を増補して八衢補遺、玉霰に證例を加へ註解を施して玉霰窓の小篠と名づけ、又片糸を著してつるぬるの差別を説いて居る。

清宮秀堅著 古學小傳

中野虎三著 國學三遷史

國學者傳記集成

三 左の名稱を説明せよ。

宇治十帖。古今六帖。相聞。東歌。和讃。組歌。

宇治十帖。源氏物語五十四帖の内、後の十帖を宇治十帖といふ。橋姫の卷以下は、董大將を主として勻宮を客として、相競ふこと源氏の致仕の大臣に於けるが如くならしめてある。二人が浮舟の君を争ふことを以て、一篇の主旨とする。而して、これは宇治での出來事であるからかくいふのである。

古今六帖。清輔の袋草子に「六帖は歌數四千六百九十六首、内長歌九首、旋頭歌十七首、貫之の女の作る處なり故に紀氏六帖ともいふ兼盛重之の歌多し」とあり。

第一帖、歳時、二帖、天、田、野、田舎、人、佛(中略)六帖、虫、木、鳥、など題を分けて集めてある、但著者に就いては異説がある。

相聞。萬葉集古義にいふ。相聞は字に拘らずして「シタシミウタ」とよむ。其は挽歌と書けるを「カナシミウタ」といへる類なり。男女の間より始めて親族兄弟朋友の上をかきたこなた相親しめる歌共を載せたり。中古以來の歌集に戀部といふに似て尙廣き稱なり」とある。萬葉集の外には用ひた處はないらしい。

和讃。經文の文を和語に直して謠ふもの、梵語のまゝなのを梵讃、漢語のまゝなるを漢

讚といひ、共に佛の徳を唱へる文である。多くは七五調で四句を一段とし數十段まである。千觀の彌陀讚、源信の來迎和讚等を、その始とすべきかといはれてをる。弘法大師の伊呂波歌が、その前驅であるともいはれてをる。

組歌。多くの小唄を組合せし處から出た名で、歌詞としては聯絡に乏しい。琴の組歌、三絃の組歌とある。琴のは八橋檢校、三絃のは石澤、柳川等の作だといはれてをる。

四 左の音韻學上の名稱を説明せよ。
清音。濁音。摩擦音。破裂音。

清濁音。カキクケコのやうな子音は、たゞ濃厚な氣臭聲帯を通ずるばかりで、これを振動させないで發する子音を清音といふのである。今調聲管其の他の位置をかへないで少しく聲帯を狭めて、多少之を振動させると濁音を生ずる。即ちガ行音がギグゲコなどこれである。故に清音濁音の別は、一に聲帯振動の有無によるのである。

摩擦音。摩擦音といふのは、調聲管の一部が非常に狭小になり、こゝを通過する氣息の摩擦して起る音をいふのである。

サシスセソ (類的摩擦音)

破裂音。破裂音といふのは、一時氣息を遮つて、この充分こもつた時、俄に之を放つによつて、起る音をいふのである。

カキクケコ (喉的破裂音)

タチツテト (齒的破裂音)

パピプペポ (唇的破裂音)

等がこれである。

五

名詞と副詞との差異を述べて左の縦線ある語の品詞を論定せよ。
沅湘日夜東に流れ去りて愁人の爲に住ることしばらくとせす。

日とか夜とか單に物の名として用ひられた時は名詞である。副詞といふは、動詞形容詞その他の副詞を限定する語である。而して、名詞は文章上必ず主語、客語、補足語として用ひられるので、副詞は説明語に關係してをる語で、その文でいふと、日夜は毎日毎晩の意で、「流れ去る」といふ説明語を限定してをるから、副詞である。東も名詞であるが、にといふ助詞を添へて、「流れ去る」を限定してをるから、副詞となるのである。暫くは本來の副詞であるが、暫なりなど使ふ時は名詞となり、本文の如く爲

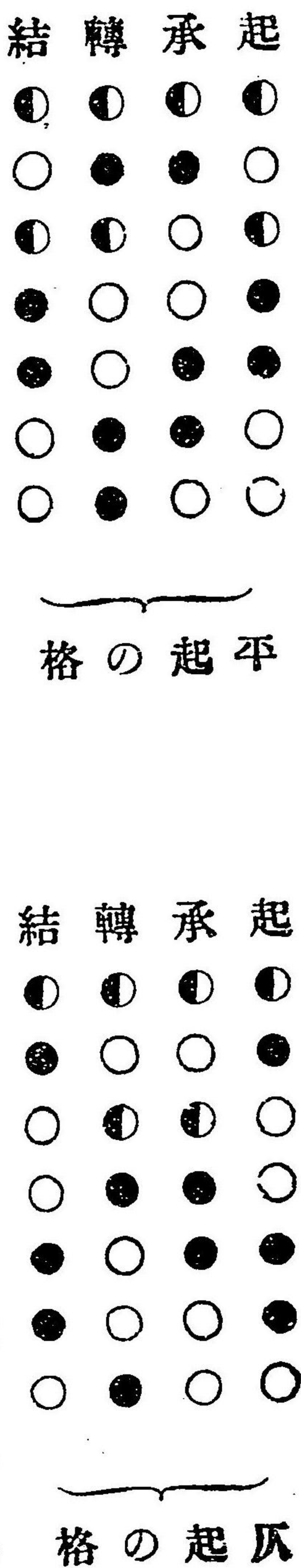
六 支那の制度に關する參考書を擧げよ。
す」といふ動詞にかゝる時は副詞となすのである。

九通。(唐の杜佑の通典、宋の椎鄭の通志、馬端臨の文獻通考、清朝勅撰の皇朝文獻通考、皇朝通典、皇朝通志、續通典續通志、續文獻通考) 卷數二千二百三十七。
七 曹大家蔡文姬につきて知れる所を記せ。

蔡文姬は名を琰と曰つて、蔡邕の女である。六歳の時に音律を知つたといふ才媛である。長じて衛仲道に嫁した。擒へられて胡にあること廿年。曹操に贖はれ還りてから其の將の董祀に再嫁した。祀嘗て罪があつて、琰操に詣りて赦を願つたが、其の辨説が實に清明理に當つてをたつたから、祀は爲に罪を赦されたといふことである。
曹大家は漢時代の人で、漢書の著班固の妹である。十四で曹世叔に嫁したが、世叔は不幸にして早く亡くなつた。この婦人は貞淑で博學多才で有つたから、和帝は之を召して宮中に入れ、皇后始め妃嬪をして、之に師事せしめて大家と號した。兄は漢書の未だ完成せぬ内に亡くなつたので、詔を奉じて之を完成したのである。又貢獻物などある毎に、詩賦を奉らしめ、鄧太后が朝に臨んで政を決するに及び、大家も之に參與

八

七言絶句につきて平仄韻字の排列を記せ。



して封侯を得た。又女誡七篇といふものを作つた。馬融は之を譽めて妻女をして習はしめたといふことである。七十餘歳で卒去したが、皇太后は素服して哀悼の意を表せられたといふことである。
右○は平字●は仄字、○は平又は仄とし、起字結の第七字目に押韻するのである。而して、平仄は二四異二六同といつて、二字目平なれば四字目は仄、二字目仄なれば六字目も仄と極つてをる。但しフミオトシといつて、起句第七字目に押韻しない事がある。かういふ場合には、起句の下三字は平起なれば○●●とする。仄起なれば、○●●とする。又○●●は平仄いづれでもよいが、孤平といつて○●●の形が生ずることはない。

堀才洞著 作詩眼 東京誠之堂出版
野口寧齋著 寧齋詩話 同 博文館發行

寄宿舎(普通文)
作文

解釋

一 冬木成春去來者不喧有之鳥毛來鳴奴不開有之花毛佐家禮杼山乎茂入而毛不取草深執乎毋不見秋山乃木葉乎見而者黃葉乎婆取而會思奴布青乎者置而會歎久會許之恨之秋山吾者。

この長歌は萬葉集一卷上に「天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之」と詞書のある歌である。

(解釋) 冬成木は冬隠とも書く。春の枕詞である。鹿持翁は生氣萌の意なるべしといひ、岡部翁は冬は萬物内に隠りて春を得て張り出づるより、此の詞はありといふておる。○春去來者は春になればといふ意である。秋されば夕されば意は皆同じで、秋シアレバ、夕シアレバの約言で、その時になりたるを切にいうたのである。○不喧有之鳥毛來鳴奴。意は明かであらう。○不開有之花毛佐氣禮杼。今まで咲かなかつた花も咲いて

をる然れども意○山乎茂。山は木が茂つてをるので、入つて鳥の音を聞かうとしても開かれぬといふ也。○入而毛不取。取は見の誤でミスならんといふ説と、取は聴と草体がよく似てをるからキカズであらうといふ兩説があるが、後説可ならむと思はれる。○草深執手母不見。草が深いから花を手折らうとしても得難いとなり。○秋山乃木葉乎見而者黃葉乎婆取而會思奴布。春山は種々面白い所はあるが私山を錦と飾る紅葉は山深く入りてを折り取つて賞翫する。○青乎者置而會難久。未だ紅葉しない青いのは、そのまゝ枝に置いて、近い内に紅葉したら、折取つてかざむなぞ、歎き思ふ。○會許之恨之秋山吾者。恨之の恨は恰の誤で、恰之とよむべきで、そこが實に楽しいから、吾は春山より秋山の方が、勝りて楽しくよい様に思はれるとなり。

鹿持雅澄著 萬葉集古義

僧契冲著 萬葉集代匠記

橘千蔭著 萬葉集畧解

右の内古義は高價で解釋が詳密過ぎるから初心の者にはいけまい。價も安く平易なのは畧解である。

二 今すべらきの天の下知し召す事四つの時九かへりになむなりぬる普き御いつくしみの浪八洲の外まで流れ廣き御惠の蔭筑波山の麓よりも茂くおはしまして萬の政を聞し召す暇もろくの事を捨てたまはぬあまりに古の事をも忘れじふりにし事をも起し給ふとて今も見そなはし後の世にも傳れとて延喜五年四月十八日に大内記紀友則御書所預紀貫之前の甲斐の目凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等に仰せられて萬葉集に入らぬ古き歌自らのことも奉らしめたまひてなすそれが中にも梅をかさすより始めて時鳥をきゝ紅葉を折り雪を見るまで又鶴龜につけて君を思ひ人をも祝ひ秋萩夏草を見て妻を戀ひ逢坂山に至りて手向を祈りあるは春夏秋冬にも入らぬくさくの歌をなむ撰ばせ給ひける(古今集序) (傍線の處のみ解釋すべし。

(解釋) 四つの時云々。四つの時は春夏秋冬の四季即ち一年をいひ、九かへりは九四即ち九年をいふ。○廣き御惠の蔭云々。人民が天皇の廣き御恩惠を蒙つてをることとは、常陸の筑波山の麓よりも茂くあつて。と聖德をたへ奉つた詞である。古今集に「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし」とあると同意である。○大内記。詔勅宣命をつくり、位記を書く職で有るから、儒者で文章の上手な者を任撰し

たのである。中務省に屬して居た○御書所預。朝廷の秘書を預る官○前の甲斐の目(カヅツラ)國司から第四番目の官で、大小に別れて居た。躬恒は以前甲斐の目であつたからかくいふ。○右衛門府生。右衛門の卑官○逢坂山に至りて手向を祈り。逢坂山は近江と山城の境にある。こゝに至り、旅人が道の神に幣を手向けて、旅中の平安無事を祈ることはいふのである。

三 女院の御庵室を觀覽あるに(中略) 杉の蒼目もまばらにて時雨も霜もおく露も洩る月影に争ひてたまうべしとは見えさりけり後は山前は野邊いざゝ小篠に風さわぎ世にたへぬ身の習ひとてうきふししげき竹柱都の方の音信はまどほにゆへるませ垣やわづかに言問ふものとは峰に木傳ふ猿の聲しづかに妻木の音是等が音信ならでは正木のかづら青つゝらくる人稀なる所なり。(平家物語)

(語釋) いざゝは細小の義。○まどほにゆへるませ垣。まどほは間遠で、間の隔つてをること、ませ垣は透間の多い垣で、ま垣ともいふのである。柴又は竹で粗く作る。○言問は、古はたゝ語る意で、尋問の意では無かつたのであるが、こゝは轉じた方の問ふ意であらう。○妻木は爪折る木の意で、これは借字である。○正木のかづら青つゝらは共

に蔓で繰るものであるから來(くる)といはむ爲の序語である。

(意解) 平家滅亡後安徳天皇の御生母建禮門院には大原の里寂光院の傍なる御庵室に世を忍ばせなされたのを、御白河法皇御幸なされて、御叡覽ある一節である。さて建禮門院の御住ませなされる庵室を御覽なされたに、屋根を葺いた杉の合せ目も、透間が多く、時雨も霜もおく露も、透間を洩れる月影と争つて、堪へられさうにも見えなかつた。彼は山が聳え、前の方は一面野原で、小さな竹の葉に風が當つて、ざはつかせ世の中の波風にたへられぬ女の身の上の事として、竹柱の竹のやうに憂き辛い事が多く都の方の便りは、透間勝に結つた粗い垣のやうに、月に一度三月に二度といふ様で、やつと時々音づれてくれる者は、峰の木々を傳つて啼く猿の聲や、時に伐木丁々の音がする位で、實に山深き處これらの音づのれの外には、尋ねくる人も稀なる所であるといふので、その修飾の妙はさすがに平家の文である。

解釋及讀方 (第一種受驗者の分)

一 使解揚如宋。使無降楚曰。晋師悉起將來矣。鄭人因而獻諸楚。楚子厚賂之使反其言。不許。三而許之。登諸樓車。使呼宋人而告之。遂致其君命。楚子將殺之。使與之言曰。爾

既許不殺而反之何故。非我無信。女則棄之。速即爾刑。對曰。臣聞之。君能制命爲義。君能承命爲信。信載義而行之爲利。謀不失利以衛社稷。民之主也。義無二信。信無二命。君之賂臣不知命也。受命以出。有死無賣。又可賂乎。臣之許君以爲命也。死而爲命臣之祿也。寡君有信臣。下臣獲考。死又何求。楚子舍之以歸(左傳)

本紙に句讀反り點送り假名を附し『』内の文章を別紙に解釋すべし。

(語釋) 義無二信。若し我が臣に命じ、又君が臣に命ずれば、是二信ある譯で義が立たぬことになる。○信無二命。上と同じく、我が君の命を受け、又君の命を受ければ、信を行ふことは出來ぬ。○獲考の考は成に同じ。

(意解) 臣はかやうな事を聞きました、君は能く命を制し、適當な人を選んで之に命ずる、之を義と爲す。臣は能く君命を奉じて之を果す、是を信となす。信は義を受け、之を行ふを利とする。謀をめぐらして利を失はず、以て國家を衛り人利民福を増進して行くのが、眞に民の主たるべき君の行動である。義に二倍といふことは無いから二人の君から臣に命ずることはない譯である。又信に二命は無い筈であるから、兩君より命を受ける譯は無いのである。それで有るから、君が臣に賂賂を贈つて君命を反

せしめようとしたのは、命を知らないのである。君命を受けて國境を出た以上、使命果すことが出来なければ、只一死あるのみで、君命を墜すことは出来ない。それ故ぞうして、君は臣に賂ひ之を反せしめることが出来ようか。然るを臣が君に許したのは君命を果す爲である。死して君命を果すといふことは、臣の君より祿を受けて居る譯である。我が君には私の様に信を盡す臣がある。下臣はこゝに君命を成し遂げたから死するとも惜いことはない。又何をか他に求めよう、求むる考は無い」といつたから楚子もこの忠義に感じて、之を赦したのである。

二 聽 箴。

程 頤

人有秉彝。本乎天性。知誘物化。遂亡其正。卓彼先覺。知止有定。閑邪存誠。非禮勿聽。

本紙に句讀反り點送り假名を附し別紙に解釋すべし。

程頤は字は世叔世に伊川先生と稱せらる。夫子の顔淵に答へられた「非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動」に感じて視、聽、言、動の四箴を作つた。聽箴は耳に對する規箴の辭である。

(語釋) 秉彝。秉は執る、彝は彝倫など熟字して、人の常道をいふのである。詩經大

雅蒸民の篇に「天生丞民有物有則民之秉彝好懿德」とある。即ち人の常道を執り守る意である。○先覺。先覺は常人に先だつて道理を悟つた者。孟子萬章上に「予天民之先覺者也」とある。○閑は防閑などいひ防ぎ止めること。

(意解) 人たる者に執り守るべき處の常道あることは、天性に本づくので、人の性は皆善であるが、私知に誘惑され、物慾に變化されて、善惡邪正様々になつて、遂にその正道を亡ふに至るのである。彼の常人に卓越して、先覺者は至善に止つて動されなことを知り、其の心が常に安定して居る故に、邪念の生ずることを防ぎ止めて、其の誠心をいつまでも保ち、禮にあらざることは聽いてはいけない。

三 本紙に句讀反り點送り假名を附すべし。

我朝深仁厚澤漸被。歷數百年。苟非狂悖不逞之徒。斷無自外履載之事。比年以來宵旰尤勤。孜孜求治。稍有智識者。皆曉然於主憂臣辱之義。惟是文告所及。不過都會之冠帶之倫。彼山野椎魯之民。其於國家之休戚。懵然而不知。或漠然不以爲意。此非民之無良也。無以喻之則不曉。無以激之則不動。無以訓迪之則智識不進。而忠義之氣雖發而不能中節。是則司教育者之責也。(清國學部尙書論教育宗旨疏)

○推魯之民。推魯は愚鈍で變通の才無きこと。訓迪は教へ導くこと。

解釋及讀方 (第二種受験者の分)

一 本紙に句讀返り點送り假名を附し別紙に解釋すべし。

孟子曰。君子所以於異人者。以其存心也。君子以仁存心。以禮存心。仁者愛人。有禮者敬人。愛人者人恒愛之。敬人者人恒敬之。有人於此。其待我以橫逆。則君子必自反也。我必不仁也。我必無禮也。此物奚宜至哉。其自反而仁矣。自反而有禮矣。其橫逆由是也。君子必自反也。我必不忠。自反而忠矣。其橫逆由是也。君子曰。此亦妄人也已矣。如此則與禽獸奚擇哉。於禽獸又何難焉。(孟子)

(語釋) 由是也。由は猶と普通にて同様の意に用ふ。何難焉。何も構ふに及ばずとの意。

(意解) これは離婁章句下の一節である。

孟子の曰ふに、君子といはれる者の尋常一般の人と違つて居る譯は、其の心を操り守つて放たないからである。凡て人は心を放ち易いものであるから、之を守つて失はないのが、君子の君子たる處である。君子は仁と禮とを守つて心を存する。仁者は人を

愛し。禮ある者は人を敬する。人を愛すれば人も亦^〇に其の人を愛し、人を敬すれば人も亦恒に之を敬する様になる。例へば此に人が有る。其の人が我に對して、道に外づれた事を以てすると、君子たる者は、必ず反省して己を責めて曰ふに、我は必ず不仁で有らう。又必ず無禮であらう、若しさうでなければ、人が我に對して横逆な行ひをする筈がない。かく無禮な事をするからには、必ず我に落度あらんこと反省する、その君子たる者が、自ら反省して仁も充分盡し、禮も充分行つたに、その横逆な事がこのやうで有つたならば、君子は自ら反省して、我必ず其の人に對して誠心を盡さぬ處が有るであらうと、自ら反省して見るに、その人の爲に謀つて充分忠を盡してあるに、横逆なる事此の如しとすれば、君子たる者は曰く、此は精神を失つた妄人である。かゝる人は禽獸と擇ぶ處はない。禽獸が我に横逆を加へたからとて、何も構ふことはない、之を棄ててしまふのである。

二 詠史

高適

尙有綈袍贈。應憐范叔寒。不知天下士。猶作布衣看。

本紙に句讀返り點送り假名を附し別紙に解釋すべし。

(解釋) これは范雎の事を詠じたのであるが、實は自らの不遇を歎ずる意が籠つて居る。

史記に、范雎字は叔始め魏の大夫須賈に事ふ。賈齊に使す。雎從ふ齊王雎が辯舌をき、金十斤を賜ふ。賈雎が國の陰事を齊に告げたるものと疑ひ、歸つて齊に告ぐ、齊大に怒つて雎を笞撃す。雎伴死し亡げて、姓名を張祿と改め秦に入る。昭王拜して相となす。賈秦に使す、雎微行して賈を見る。賈之を哀んで曰く、范叔一寒此の如きかと、綈袍を取つて之を贈る。雎因て賈の爲に御して相府に入る。雎先づ入る。賈待つこと良久し、門下に問うて大に驚き、自ら賣らるゝを知り、肉袒膝行して死を請ふ。雎が曰く、汝が罪三あり。然るに死するなき所以は、綈袍戀々として、故人の意あるを以てのみ」と、須賈始めは范叔を悪んだが、今日その窮約の状を見て、之を憐んで綈袍を贈つた。尙ほ故舊の情があるのである。此は天下の士たるを知つて、之を贈つた譯ではなく。范叔の天下の士たることを知らずして、只范雎を一寒生と思つて、布衣の看をなして、之を贈つたことは、人を見る明がないのである。と曰つて自らの不遇を憤つたのである。

三 本紙に句讀、返り點、送り假名を附すべし。

太史公曰。詩有之。高山仰止。景行行止。雖不能至。然心鄉往之。余讀孔氏書。想見其爲人。適魯。觀仲尼廟堂車服禮器。諸生以時習禮其家。余低回留之不能去云。天下君王至于賢人衆矣。當時則榮。沒則已焉。孔子布衣。傳十餘世。學者宗之。自天子王侯。中國言六藝者。折衷於夫子。可謂至聖矣。(史記孔子世家)

第二十二回國語漢文科豫備試驗

(明治四十一年八月)

設問

一 左の語の讀方を問ふ。

盤涉調、豊樂殿、春宮大夫、袖、直衣、母屋、除目、歌合、萬里小路、流鏑馬。

パンシキテフ、ブラクデン、トウグウノダイブ、アコメ、ナホシ(ナウシとも)、モヤ、
チモク、ウタアハセ、マデノコウジ、ヤブサメ。

二 左の語を説明せよ。

衆議判。旋頭歌。序歌。浮世草子。宣命。

衆議判。歌合の時、撰者を定めなくて、多數の人で評議の上、勝負を判決するをいふ。

旋頭歌。形式をいふと、上の句下の句共に五七七の三句から成つてをり、上句からいふ
ても、下句から讀んでも、意味の通ずる、即ち下句から頭に旋らすといふ意味からつ
けた歌の一體で、「セドウカ」とよむ。例を擧げると、

打わたす をちかた人に もの申すわれ

そのそこに しろく咲けるは なにの花ぞも
の如きものである。

序歌。やはり三十一文字の歌であるが、或る思想感情を發表せんとするに當り、その序として、その語に縁故ある詞を持つて來て冠するので、枕詞に似てをるが、彼は五文字なるに、これは二句も三句もつゝかる場合があるのが異なるのである。

むすぶ手の雫に濁る山の井の(序)あかでも人に別れぬるかな
の如きがそれである。

浮世草子。元祿時代の小説、西鶴の一代男一代女などを始として、自笑等の八文字舎本をも併せていふので、この時代を寫實したものであるから、滑稽な事が多い。

宣命。神に申し上げる文を祝詞といひ、下々に宣り給ふ文を宣命といふのである。宣命は改元とか大赦とか立后とか任大臣とかに下される萬葉假名で書いた國文である。續日本紀に六十二篇見え、之を本居宣長が註して、歷朝詔詞解といふ。わが國の古文として最も貴ぶべきものである。

三 左の熟語を説明せよ。

格物致知。徑庭。函丈。良知良能。度支。

格物致知。朱子がいふのに「格は至也物は猶は事の如きなり。事物の理を窮至して、その極處に到らざる無からんことを欲するなり」とある。大學に「欲誠其意先致其知」の語がある。格物とは「格致」の略物」とある。これその出處である。

徑庭。徑は門前の路、庭は堂外の地、其の間隔てがあるよりいふとの意とする。一説には、徑は門前の路、庭は堂外の地、其の間隔てがあるよりいふと。今一説には、徑は狭く庭は廣きによるといふ説もある。莊子に「大有徑庭、不近人情」とあるが始であらう。

函丈。師の席をいふので、函は入るゝ意、一丈の地を容れて、指畫するに足らしめるのである。禮記曲禮に「凡爲長者云々若非飲食之客則布席、席間函丈」とある。註に講問の客をいふとあるので、先生長者に對し尊敬の意を表して「某先生函丈」などを、書面の脇付等に書くのである。

良知良能。人が思慮をめぐらさずして、道理を知るのを、良知といひ、學ばないで能くするのを、良能といふ。孟子盡心章上に「人之所不學而能者、其良能也。所不慮而知

者、其良知也」とある。

度支。「タクシ」とよむ。清國や韓國に度支部といふのがあつた。是はわが大藏省と同じである。度支の意味は、金錢の出納を司ることをいふのである。

四 左の文法上の名稱を説明せよ。

音便、副詞、修飾語。

一音便といふのは、連聲上の便宜によつて、音の轉化することをいふので、開きて 開いて いひて いうて かひて かつて 止みて 止んで かみがき(髮搔) かうがい。等のやうに、大體のきまりはあつたのである。

一副詞は動詞、形容詞、その他の副詞に添つて、その意味を限定する詞で、遙に望むの「遙」、速に走るの「速」、頗る善しの「頗る」、のやうに純然たる副詞もあり、高く揚るの「高く」、面白く感ずるの「面白く」のやうに、形容詞から成るものもあり、又日々學校に行くの「日々」の如く、名詞よりなるものもあり、行く／＼熟考したの「行く／＼」のやうに、動詞を重ねるものもある。而して、文章上からいふと、必ず説明語を修飾す

べき筈である。

一修飾語。文章を組成する各成分を修飾する語をいふので、説明語を修飾するものを副詞的修飾語といひ、主語、客語、補足語を修飾する語を、形容詞的修飾語といふのである。併し修飾語は文章の主要成分でないから、無くては意義は通ずる。例へば

犬 猫を追うて 走る

で意は充分に通ずるが、各成分に修飾語を加へて、

白き犬 黒き猫を 追うて 速に走る。

とやうに書くと、意は益明瞭になるのである。

五

唐宋に於ける古文復興の始末を略記せよ。

唐代の初にあつては、六朝 儷体の餘習を承けて、初唐の四傑最も文名を馳せたが、彫琢を事として、辭句の華嚴を競ひ、千篇一律の時文であつたが、中世に至るに及んで、漸く古文復興の氣運を助長して、稍達意の文を見るやうになつた。陸贄の上奏文などがそれである。韓愈が出で、古文辭を唱道し、柳宗元等と和するやうになつて、達意を主とした紆餘曲折の文を見るに至つた。謂ゆる八代の衰を起した古文の体で、唐

代一王の文である。これから宋代に及んで、宋初の文體は、五季衰殘の後を承けてを
るから、纖儷の習味を脱することは出来なかつたが、この排偶駢儷の文を變じて、古
文を作り始めたのは、柳開である。併し未だ佶儷難澁で讀み悪い處は、世の文體を變
せしめる力は無かつたが、穆脩が出で、韓柳を表章するやうになつて、尹洙、歐陽修等
輩出して、文運は頓に勃興し、五代浮靡の風を一掃した。是から三蘇曾王出づるに及
び、宋朝一代の文を大成して、後世に範を垂れるに至つたのである。

作文

夏期休業(普通文)

國文漢譯

一 たゞ一の誠もてこそ大ぞらをも動しつべし(花月草紙)
惟一誠可以動天。

二 人の心の内にもとより此樂あり私慾行はれされば時となく所として樂しからずといふ
事なし(樂訓)
人心中自有此樂私慾不行則無時不樂無所不樂。

(注意) 第二種の受験者作文第一第二に答ふるを要せず。

解 釋 (第一第二種共通の分)

一 屏風障子などの繪も文字もかたくななる筆様してかきたるが見にくきよりも宿のある
じのつたなく覺ゆるなり大方もてる調度にても心おとりせらるゝ事はありぬべしとのみよ
きものを持つべしにもあらずそんなせざらん爲とて品なく見にくきまにせし珍しから
んとて用なき事をもしそへわづらはしく好みなせるをいふなりふるめかしきやうにせし
くことくしからず費もなく物からのよきがよきなり(徒然草)

(語釋) 屏風。屏は退く也風を退くるなり。又屏は蔽なり、風を蔽ふ也ともいふ。障
子は今の「襖フスマ」で、今の障子は明障子といつて區別したものである。○かたくな、
頑の字の意であるが、こゝは拙く見苦しきこと。○ことくしからずは仰出でないとい
ふ意。

(意解) 屏風や障子などに書いた繪畫や文字も、實に下手で見悪い書様であるのか、
見悪いよりも、さやうのものを立て、得々として居る宿の主人の無風流が、推はか
られるのである。大方持つてをる手廻りの道具でも、その持主の心が、如何にも下品

に思はれる事があるであらう。併しさ程よい品物を持つがよいといふのではない。この品物を損傷せまいと思つて、無さまな見苦しいさまにし、珍しく思はせうとして、別にしなくともよい事をつけ足し、非常に面倒に種々の事をして、大切に持つをいふのである。古い品物のやうで、さう仰山に人の目に立つやうの事なく、費用もかゝらず品柄の良好な物がよいので、さういふ品を持つてをる者は、何となく奥ゆかし、思はれるものである。

三 日來の行幸に事かはつて鳳輦は數萬の武士に打圍まれ月卿雲客は怪げなる籠輿傳馬に扶け載せられて七條を東へ河原を上りに六波羅へと急がせ給へば見る人涙を流し聞、人心を傷ましむ悲きかな昨日は紫宸北極の高きに坐して百司禮儀の妝を刷ひしに今は白屋東夷の卑きに下らせ給ひて萬卒守禦のきびしきに御心を惱まさる時移り事去り樂盡きて悲來る天上の五衰人間の一炊たゞ夢かとのみぞおぼえたる(太平記)

(語釋) 月卿雲客。公卿殿上人といふに同じである○籠輿。貞文雜記に「今の籠輿乗物の類なるべき歟」とある。兎に角粗末な乗物だらう○傳馬。昔官人の乗用に供へた馬で、孝徳帝二年始めて畿内に驛馬傳馬を置かれた。徳川時代には諸道宿驛に置いて

官公物を送る用に供した○紫宸北極。紫宸は天帝の居をいふ。紫宮とも紫微ともいふのである。北極とは、太極のことと天子の位に比していふのである。故に紫宸殿の北の義○白屋。賤人の居る所をいふのであるが、それから轉じて直に賤しい人の事にもいふ○東夷。關東の武人を賤んでいふ語○天上の五衰。天人が天命終らんとする時五死相が現はれる。一、華冠萎む二、腋下汗出づ三、蠅來つて身につく四、更に天有つて己の座に座するを見る五、自ら本座に樂まず。又一、衣塵埃に染む二、華臺萎む三、兩腋汗出づ四、臭氣身に入る五、本座に樂まずともある。兎に角死せんとする時五つの衰相を現はすことをいふのである○人間の「一炊」。この世のはかない事をいふので、李秘中記に開元十九年、道者呂翁于邯鄲邸舍中、值少年盧生、自嘆其困、翁操囊中枕、授之曰、枕之當令子榮適如意、生于寐中娶清河崔氏女、舉進士、登甲科、官河西隴右節度使、尋拜中書侍郎同中書門下平章事、掌大政二十年、封趙國公、三十餘年出入中外、崇盛無比。老乞骸骨、不許、卒于官。欠伸而寤。初主人蒸黃粱爲饌、時尚未熟也。呂翁笑謂曰、人世之事、亦猶是矣。生曰、此先生所以窒五欲也、敢不受教、再拜從而去とある。是をいふのである。

(彙解) これは後醍醐帝が囚はれの身とおなりなされて、六波羅へ護送される處の一節である。

日頃の行幸とはまるで違つて、御乗物は何萬といふ武士共に護衛され、諸の公家方は變な籠輿や傳馬に載せられて、七條通りを東へ、鴨の河原を上り、六法羅の役所へと急がせなされば、見る人は、一天萬乗の君と仰がれなかつた身が、かやうになつたので、その哀さに涙を流し、この事を聞く人は、心を傷ましめて悲しく感じた。悲しい事である。きのふは天子の高き位におはしまして、百官は御言かしこみて、禮儀を盡しなされたのは、今は東夷の爲に囚はれの身とおなりなされて、多くの武人の守護を受けられて、御心を惱まされる。時機も移り、計畫された事も最早施す事も出来なくなり、樂が盡きて悲しみが來た、浮世はかゝるものか、天上にも五衰があり、人間界は黃梁一炊の夢のやうである。これを思へば、今までの事はまるで夢の如く思はれるとなり。

萩野由之校補

太平記註釋

東京誠之堂出版

三木大塚共著

太平記詳釋

日本圖書株式會社版

解釋及訓點

(第一種第二種受験者共通の分)

三 子曰。法語之言。能無從乎。改之爲貴。巽與之言。能無說乎。釋乃爲貴。說而不釋。從而不改。吾末如之何也已矣。(論語)

(語釋)

法語之言。正しい語、猶ほ直言といふに同じく○巽與之言。乖き忤ふ事なくその言を婉曲にして導く詞○說は悦に全し○釋は尋ぬる也○末は無に同じ。

(彙解)

此の章は、知行合一を説かれた教育上有益の章である。

孔子の曰はれるに、正しい言を以て人に告げたならば、其は必ず能く従うであらう。けれども實際自分の過を改めるといふ事は、中々むつかしい。故に之を改めるを貴しとする。又向の人に親切に、語を婉曲にして之を導いたなら、皆悦んで其の親切を受けるであらうが、之を能く尋ね研究して、實行して行く者は少い。故に之を尋ねるのを貴しとする。假令悦んでも尋ねない。従つても改めないとしたならば、此は眞に分つたといふ事は出来ない。かやうな人は如何ともする事の出来ない人である。

孟子曰。求則得之。舍則失之。是求有益於得也。求在我者也。求之有道。得之有命。是求無益於得也。求在外者也。(孟子)

(語釋) 在我者。仁義禮智凡そ性の有する所の者を謂ふ○在外者。富貴利達の如き者を謂ふ。

(意解) 孟子の曰ふのに、求めさいすれば之を得る事が出来、舍て、顧みなければ之を失ふ、即ち得ると失ふとは求める求めないにある。是は得るに益のある者である。その求める所は、我が性の有して居る所のものであるから、求めようとすれば、必ず得られる。之を求めるに方法があり、之を得るに命数が有つて、必ずしも得る事が出来ない、是は求めようとしても得られないから、得るに益のない者である。即ち富貴利達の如きは外に在る者であるから、得ようとして得ることは出来ない。故にかやうな者は、天命に一任して、求めれば得られる仁義の道を得ることを心掛くべしとの意である。

訓 點 (第一種受験者の分)

四 建國號大元。詔曰誕膺景命。奄四海以宅尊。必有美名。紹百玉而紀統。肇從隆古。匪獨我家。且唐之爲言蕩也。堯以之而著稱。虞之爲言樂也。舜因之而作號。馴致禹興而湯造。五名夏大以殷中。世降以還。事殊非古。雖乘時而有國。不以義而制稱。爲秦爲漢者。蓋從

初起之地名。曰隋曰唐者。又即始封之爵也。是皆約百姓見聞之狃習。要一時經制之權宜。概以至公。得無少貶。我太祖聖武皇帝。握乾符而起朔土。以神武膺帝圖。四振大聲。大恢土宇。輿圖之廣。歷古所無。頃者。耆宿詣廷。奏章伸請謂。既成於大業。宜早定於鴻名。在古制以當然。於朕心乎何有。可建國號曰大元。(十八史略)
○誕は大になり○膺はあたる也○宅は宿るなり○匪は非に全し○夏大以殷中の以は與と同じ○恢は大にする也。

解釋及訓點 (第二種受験者の分)

四 自漢興掃除繁苛。與民休息。孝文加以恭儉。至孝景遵業。五六十載之間。移風易俗。黎民醇厚。國家無事。人給家足。都鄙廩庾皆滿。而府庫餘費財。京師之錢累鉅萬。貫朽而不可校。大倉之粟陳々相因。充溢露積於外。紅腐不可勝食。爲吏者長子孫。居官者以爲姓號。故有倉氏庫氏。人々自愛而重犯法。然罔疎民富。或至竊盜。兼併之徒。武斷鄉曲。宗室存土公卿以下奢侈無度。物盛而衰。固其變也。(十八史略)

本紙に句讀返り點送り假名を附し傍線の句を別紙に解釋すべし。
(解釋) 陳々相因。陳は舊きなり。即ち陳腐堆積する意○然罔疎云々。罔は網に通ず

法網のこと。郷曲は郷里なり。然れども法網が疎濶で、民が富み榮えて居るから、時によると餘り驕り高ぶつて、常規を逸するやうになる。又富豪の勢に乗じて、小民の田園を兼併するやからが、威力を以て是非曲直を主斷する。皇帝の親族國を有つ所の諸侯、朝廷に仕へて居る公卿以下、奢侈に耽る者がさまりが無い。物盛で又衰へる時の來るのは、固よりの變化で、己むを得ぬ事であるとなり。

訓點 (第一種受験者の分)

五 光緒某年某月某日。内閣奉上諭。通商惠工。爲古今經國之要政。自積習相沿。視工商爲末務。國計民生日益貧弱。未始不因乎此。函應變通盡利加意講求。前據政務處議覆載振奏詣設商部。業經降旨允准。茲著載振袁世凱伍廷芳。先訂商律作爲則例。俟商律編成奏定後。即行特簡大員開辦商部。其應如何提倡工藝鼓舞商情。一切事宜均著載振等。悉心妥議。

○著するは命ずるといふに同じ、時文の慣用語。

大野徳孝著 標註支那時文讀本 大日圖書株式會社發行
全 人著 同高等支那時文讀本 國光社發行

青柳篤恒著 支那時文軌範 博文館出版

解釋及訓點 (第二種受験者の分)

五 朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。(唐詩選)

(語釋) 白帝城。公孫述の築く處、始公孫述魚腹に至るや、白龍が有つて井中から出た。自ら思ふに漢の土運を承くと、故に白帝城と號したといふことである。

(意解) 朝早く彩雲のたなびく白帝城を發して、江を下ると、江陵まで千里の間を一日にして還る。水勢が急で、奔流激湍ながら矢を射る様である。兩岸の峽樹には猿の長嘯するのが有つて、耳に至り久しうして絶える。その内に舟は既に萬重の翠巒を過ぎてしまふといふので、輕舟奔駛の様目前に見えるが如しである。

同本試験 (明治四十二年二月)

設問

(注意) 第二種受験者は設問の(五)(六)に答ふるを要せず

左の圈點を附したる語を品詞上より解剖せよ。

(イ)心あてに折らばやをらん初霜のおきまどはせる白菊の花。
 (ロ)うるし植ゑば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめや。
 折ら。ヲ行四段活の動詞、他動詞、第一變化未然形。
 ば。接續の助詞、動詞の第一變化に接するを未定法となり、第五變化に接すると既定法となる。

まどはせ。サ行四段活の動詞、第五變化已然形、他動詞。
 る。現在完了の助動詞、四段活の已然形サ行變格の未然形に接續する。
 根。名詞。

さへ。一つある上に又加はる意の助詞、添への轉ならんといふ。
 枯れ。ヲ行下二段活の動詞、第一變化、未然形。

め。むといふ未來をあらはす助動詞の變化。
 や。反語の意をあらはす助詞。

二 左の文を文章法の上より解剖せよ。

この殿には後夜に召す卯酒の御さかなにはたゞ今殺したる雉をぞ參らせける。

主語 人(が) 形 容 詞 句 修飾 主語 修飾 説明語 修飾 補足語 修飾 補足語 修飾 客 修飾 部

せける

三 神樂歌、催馬樂に関する註釋書をあげよ。

- 神樂催馬樂入綾 橋 守部 著
- 神樂催馬樂考 加茂 眞淵 著
- 梁塵愚案抄 一條 兼良 著
- 神歌樂新釋 本居 太平 著
- 神樂催馬樂通解 今井彦三郎 著

四 俳句と川柳との區別如何

俳句はもと發句といつて、五十韻又百韻と長くつゞけた俳諧の初句十七文字が、獨立して一つの詩形となつたので、天地萬象を詠じ、無限の趣味をこの小詩形の中に求めむとするにある。通俗なる中に高雅なる趣味を得んとするが、俳句の特技である。川柳は俳句によく似てをるが、少しく趣が變つてをる。川柳は重に材料を人事百般の上

五 左の人名につき知る所を記せ。

庾信 李夢陽

庾信。南北朝時代の詩人で、字を子山といひ、肩吾の子である。群書に通じて最も春秋左氏傳に精しかつた。時に徐擒父子と庾肩吾父子と共に梁に仕へて、共に詩文に巧みであつたので、世に徐庾體と推稱された位である。庾信は後周に仕へて開府儀同三司となつた。枯樹賦等その有名な作である。

李夢陽。第十五回の設問中で詳しく述べた。

六 左の文中の之の字の用法を區別せよ。

自誠明謂之性。自明誠謂之教。(中庸)

博愛之謂仁。行而宜之之謂義。(韓文原道)

これはつまり之字が謂字の上にあると、下にあるとの區別である。伊藤東涯の用字格に、之謂はもとより付きたる名なり。謂之はこの方より名づくるなり。畢竟自然と作爲との別なり。朱子語類云謂之名之也之謂直爲也。中庸大全黃氏洵繞云首章言謂者直

謂之也謂之者名之也程緩」とこれらの辨にてしるべし」とある。廣池千九郎氏は之を論じて「易に富有之謂大業日新之謂盛德生々之謂易とあるが、之は富有謂之大業と云ふ如くに作るべきを、何故に之字を直に目的格の下に置いたかといへば、これは語勢を急劇にして、多少感動の性質を文意に含ましめんとする時に、かやうにするのであると思はれる。故にこの場合には、之字の位置は謂字の上にありても下にありても意義上の差異は生せぬのです」といはれて居る。どうも此説が信すべきが如くに思はれる。

七 左の句を漢譯せよ。

イ、氷は水より寒し。 ロ、病は口より入る。 ハ、彼は此より善し。

ニ、生民より以來未だ孔子より盛なるはあらず。

(イ) 氷寒於水 (ロ) 病從口入 (ハ) 彼善乎此。

(三) 自生民以來未有盛於孔子也。

解釋

一 高山はうねびををしと耳梨とあひ争ひき神代よりかくなるらし古もしかなれこそ虚蟬

もつまをあらそふらしき。(萬葉集)

(語釋) 高山はカジャマとよむ。耳梨とうねびとこの三山は大和にある。而して、うねび山は女山である○ををし。雄々しではない、を愛しの意である。本文には雄男志等とあつて、鹿持翁はヲエシとよませる説である○虚蟬も。現在の身もといふ意○あらそふらしき。らしきは俗にラシイといふに同じである。

(意解) これは中大兄皇子の御歌で、播磨風土記にある故事を聞きなされて、咏みなされた歌である。その故事は、高山と耳梨山と女山の雲根火山を争つて相闘ふと、出雲の阿菩と申す神が聞きなされて、播磨までお出かけになつたに、争が止んだといふので、そこに留りなかつたといふのである。

さて大意は、高山は雲根火を非常に愛らしいと思つて、耳梨山と相争つた。神代から男女の戀愛といふものは、かやうなものらしい。古もかやうな譯であるから。現在人間界の人も妻争をしきりにやるが、男女間の情念のもえる時は、皆かやうに争ふが人情らしいと也。

二 御車もいたうやつし給へりさきもおはせ給はず誰とか知らんとうちとけ給ひて少しさ

しのぞき給へれば門は葎のやうなるをおしあけたりみいれの程なく物はかなきすまひを
あはれにいづこかさしてとおもほしなせぞ玉の臺も同じ事なりきりかけだつものにいと
青やかなる葛の心地よげにはひかゝれるに白き花ぞおのれひとりゑみの眉ひらけたるをを
ち方人に物申すとひとりごち給ふを御隨身つい居てかの白くさけるをなん夕顔と申し侍る
花の名は人めきてかう怪しき垣根になん咲き侍りけると申すげにいと小家がちにむづか
しげなるわたりのこのもかのもあやしうちよろほひてむねくしからぬ軒のつまごとしに
はひまつはれたるを口をしの花のちぎりや一房折りて參れとのたまへばこのおしあけたる
門に入りてをる (源氏物語)

(語釋) みいれの程なく。奥深くないことをいふ○いづこかさして。是は古今集の「世の中はいづこかさしてわがならんゆきとまるをぞ宿と定むる」とあるを思ひよせたである○玉の臺。源氏は常に金殿玉臺に御住なさる身であるから、このはかなき住居を見て觀じ給ふのである○きりかけだつもの。板を連ねて垣なぞにしたもの○をちかた人に物申す。旋頭歌に「うちわたすをち方に物申すわれ、そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」とある。この心を用ひたのだ○御隨身。高官の方に護衛の爲につけられ

る武人である「ミズギシン」とよむ〇ついで。つきあての音使、かしこまることをいふ〇むつかしげ。俗にむさくするといふ心〇むねくしからぬ。チャンとしないことをいふ。

(意解) これは光源氏六條あたりの御忍びあるきの一節である。

光源氏は皇子でありながら、御微行の事であるから、御車も大層省峇されて、網代の車に召され、先拂ひもし給はず。かゝる御出でたちであるから、誰も知る者はあるまい。と車の物見から少しさしのぞきなさつた處が、門は蔀のやうなのをあけてあるが、奥深くもない、見すばらしい住居を、あはれに思召されて、この世はとても眞の住居でないから、かやうな處に住むも、玉の臺に住むも、觀じ來れば同じ事である。板屏のやうな物に、大層青い蔓の生々と這ひかゝつてをるに、白い花がこの小家の哀な様をよそに見て、處得顔に咲誇つてをるのを御覽なされて、處のさまよく似たれば旋頭歌にある「をちかた人に物申す」といふ歌を口ずさみなさるを、御供の人はかしこまつて「あの白く咲いてをるのを夕顔と申します。花の名は人らしくて、このやうな變な垣根に咲いたのである」と申しました。實に小家ばかりついで、むさ苦し

いやなあたりのあちらこちら打傾いて、しつかりせぬ軒の端などに、這ひまはつてをるのを、「貴人の家には咲かないで、かやうなあばら家の軒に巻きついてさいたのは實に残念な花の契である」と思召されて、一房折つて參れ。と仰せられたから、このおしあけてある門の内にはいつて、夕顔の花を折つた。となり。

三 池の船さしよせて左右の講師たかすけ爲冬のせらる。御みきなごまるさまも、うるはしきことよりは艶になまめかし人々の歌いたくけしきばみてとみにも奉らずいと心もとなして月なみもくもりなき池の鏡にはねどしるき秋のもなかはげにいとことなる空の景色に月もかたぶきぬあけ方近うなりにけり上の御製

かねのおとも傾く月にかこたれて

をしとおもふ夜はこよひなりけり (増鏡)

(解釋) 左右の講師。歌合をする時、左右の歌を番ひ合せる。そをよみあぐる人を、左右の講師といふ〇うるはしき事よりは云々。うるはしい美しい意から端正の意となつたので、こゝは禮儀ばつて正しいといふよりは、何となくみやびであだくしいといふ意〇てる月なみ云々。これは「水の上にてる月なみをかぞふればこよひは秋のも

「まかなむける」といふ歌によつて書いたので、月なみは月次であるが、池といふ處から、月月波にかけたのである。さてその大意は、照る月次も、曇りのない池の鏡にうつつてゐる處を見れば、いはなくともよくわかつてをる、即ち秋の十五夜である。實に別段美しい空の景色である。その景色に見とれてをる中に、はや月も傾いて、入り方になつたと也○かねのおもと云々。かこたれてとは、恨めしく思はれてといふ意である。一首の大意は、見れどもく飽かぬ月が傾いたのも、鐘の音に促されてであるやうな心持がして、鐘の音が恨めしく思れる程惜しい。今少し「山の端にげて入れずもあらなん」と感ぜられる。實に惜しいのは、今宵の月夜である。と月の入るを惜まれたのである。

解釋及讀方 (第一種受験者の分)

一 邾人以須句故出師。公卑邾不設備而禦之。臧文仲曰。國無小不可易也。無備雖衆不可恃也。詩曰。戰々競々。如臨深淵。如履薄冰。又曰。敬之敬之。天惟顯思。命不易哉。先王之明德猶無不難也。無不懼也。况我小國乎。君其無謂邾小。蠶蠶有毒。而况國乎。弗聽。
(左氏傳)

(語釋) 卑は輕んずる也○易は慢るなり○顯思。顯は明か、思は辭である○蠶蠶。蠶は蜂のこと蠶はさそりと云ふ虫で、尾に刺が有つて、非常に毒がある。長尾なのを蠶といふ。

(意解) こゝは僖公廿二年の條の一節である。

始め侏人須句を滅ばした。須句の子が來奔したから、僖公は、を伐つて須句を取らうとした。後邾人が須句の故を以て兵を出して、僖公と戦ふことになつた。公は邾を小國として、輕んじて備を設けないで之を禦いだ。臧文仲が諫めて曰ふには、國たる以上はさう少さいものでは無いから、侮つてはならない。若し備が無かつたならば、魯はいかに兵が多くとも待みにすることは出来ない。詩に云うてあるでは無いか、戰々競々と懼れることは、深い淵をのぞくがやう、又薄氷を履むがやうである。又いふには、之を敬ひ之を敬へよ。天はこれ明かなものである。此明かな天の命は、容易なものではない。それで有るから、國を保つものは、宜しく天命を敬ひ戒めなければならぬ。天は明かに下に臨んで居るから、其の命を遵奉することは、甚だ難いのである。明德ある先王すら、天の命を奉承して行くことは難しとし、又懼れたのである。

ことは、二詩の意によつても明かであらう。況して我が小國は、別して戒懼しなければならぬ。我が君それ を小として侮ること勿れ、蠶蟄の様な小虫でも非常な毒を有して人を刺す。況して小なりと雖一國である。決して油断なさらぬ様にといつたけれど、公は遂に御聽入が無かつた。果して魯は敗績して、人公の冑を獲て之を魚門に懸けた。

二 自春秋作。而亂臣賊子懼。孟子之言行而楊墨之道廢。天下以爲是固然而不知其功。孟子既沒有申商韓非之學。違道而趨利。殘民以厚主。其說至陋也。而士以是罔其上。上之人僥倖一切之功。靡然從之。而世無大人先生如孔子孟子者。推其本末。權其禍福之輕重。以救其惑。故其學遂行。秦以是喪天下。陵夷至於勝廣劉項之禍。死者十八九。天下蕭然。洪水之患。蓋不至是也。方秦之未得志也、使復有一孟子則申韓爲空言。作於其心。害於其事。作於其事。害於其政者。必不至若是烈也。使楊墨得於天下。其禍豈滅於申韓哉。由是言之。雖以孟子配禹可也。(唐宋八家文)

(解釋) 秦の國がまだ天下を統一するに至らなかつた前に、復孟子のやうな偉大な人物が有つたならば、申不害や韓非の唱へる處の刑名法術の學は、此の世に益のない空

漠の説となり、實行されずに終つたであらう。さうして彼等の不正な心から出來て、行事に害を及ぼし、其の行事に害から起つて、其の政事に禍害を及ぼし、遂に秦の世に至つて、人民に慘害を蒙らしめたことは、此のやうに烈しくは無かつたであらう。

解釋及讀方

一 孟子曰。仕非爲貧也。而有時乎爲貧。娶妻非爲養也。而有時乎爲養。爲貧者辭尊居卑。辭富居貧。辭尊居卑。辭富居貧。惡乎宜乎。抱關擊柝。孔子嘗爲委吏矣。曰會計當而已矣。嘗爲乘田矣。曰牛羊茁壯長而已矣。位卑而言高罪也。立乎人之本朝。而道不行耻也。(孟子)

(語釋) 富貧は祿の厚薄をいふ。○抱關の關はくわんぬきで門を守る役をいふ。○擊柝。柝は拍手木といひ、夜を衛るに撃つ木である。即ち夜番のこと。○委吏は主委積之吏也とある如く、倉庫に納むる多少の會計を主る吏である。○衆田は獸を畜ふことを主る役。○茁は草木の萌芽する貌である、それから牛馬の生長する形容ともなつた。○本朝。本年本月などいふ本で、當朝といふに同じ。

(意解) これは、君子が官に仕へるのは、道を行ふを以て主とする。併し時には貧の

爲に仕へることがあることを論じたのである。

孟子が曰ふのに、君子たる者が官途に就くのは、貧の爲にするのではない。道を行はむが爲である。しかし時によつては、貧の爲にすることもある。妻を娶るのは、養の爲にするのではない。繼嗣の爲にするのであるが、時によつては、自分で井臼の勞を操ることが出来ないから、餽養の爲に妻を娶ることがある。道を行はむが爲に仕へるでなく、祿仕するは固より正しいものでない。故に貧の爲に仕へる者は、位の高いのを辭して卑官に居り、祿の原いのを辭して薄きに居る。位卑く祿薄い處に居るには、どんな職がよいかといふに、もとより貧の爲であるから、飢寒を免れることが出来れば澤山である。故に抱關擊柝のやうな賤しい役を撰ぶがよい。孔子は嘗て貧なるが爲に仕へて、倉廩を主る處の吏となつた。曰ふのには、わが司る所は金錢米穀の出納であるから、會計がよく當つて違算がなければよいと、又嘗て獸類を畜ふ吏となつたことがある。曰ふ我が司る所は牛羊であるから、牛羊が苗として肥えふとり生長して行けば、職務は盡したりといつてよいと曰はれたが、貧の爲に仕へる者は、固より道を行はうが爲でないから、其の主る所の職務を勤めれば、それで充分である。位卑く

ゝて職分以外の高いことをいふは罪惡である。「其の位に在らざれば其の政を議せず」とある如く、道を行ふ位置で無ければ、言を高くすべきでない。若し官位が尊く人の朝廷に立てば、勿論道を行はねばならぬ。尊位に居つて道の行はれないのは耻である。故に道の行はれないのを見て、君子の貧賤に居るは、この譯である。

二 武帝方招文學儒者。上曰吾欲云々。黯對曰。陛下内多欲而外仁義。奈何欲效唐虞之治乎。上默然。怒變色而罷朝。公卿皆爲黯懼。上退謂左右曰。甚矣汲黯之謫也。群臣或數黯。黯曰。天子置公卿輔弼之臣。寧令從諛承意陷主於不義乎。且已在其位。縱愛身奈辱朝廷何。黯多病。病且滿三月。上常賜告者數。終不愈。最後病莊助爲請告。上曰。汲黯如何人哉。助曰使黯任職居官。無以踰人。然輔其輔少主。守城深堅。招之不來。麾之不去。雖自謂貧。亦不能奢之矣。上曰然。古有社稷之臣。至如黯近之矣。(史記)

(解釋) これは汲黯傳の一節である。黯は武帝に仕へ剛直を以て憚られた人である。莊助がいふには、汲黯をして官職に任じ其の務を行はせたらば、人並以上に行ふといふは、或は難いであらう。けれども、年の若い幼君を補佐して、堅固に城を守る所に至つては、富貴を以て之を招いても來らない、利害を説いて之を麾いても去らない。

必ず彼は孤忠を守つて、節に殉するに違ひない。自ら古の勇者賈賈夏育に比する者でも、其の志を奪ふことは出来まいと也。

第二十三回國語漢文科豫備試験

(明治四十二年八月)

設問

一 左の語を説明せよ。

衣冠、束帶。宰相、相國。公卿、公家。宣旨、令旨。堂上、地下。

衣冠、束帶。冠をかぶり單、下襲、を重ね、其の上に袍を着し、裾すそをつけ、赤大口の上うへに表袴を着し、石の帯にて裝束をかため、襪をはき、靴の沓又は淺沓をはき、笏を持つをいふ。これが古の正装である。武官は平緒で太刀をはく。

衣冠は大體束帶のやうであるが、畧式である。衣冠の時は、縫腋の袍とゆつて兩腋を縫ひふさいだ袍を必ず用ひ、表袴を用ひないで指貫をはき、石帯を用ひないで腰帶を用ひ、檜扇を持つだけがちがふ。

宰相、相國。宰相は大臣の唐名であるが、參議は朝政に參與すること大臣と同じやうであるから、ことさらに參議のことをいふたのである。相國又は大相國は大政大臣といふ支那の官名である。平清盛を入道相國といふたもこの例である。

公卿、公家。公卿は「クギョウ」とよむ。大臣、納言、參議及三位以上の人々をいふたので、四位でも參議は公卿である。名のもとには三公九卿といふ支那の官名によつたものである。公家は「クゲ」とよむ。もとはオホヤケの義で、天皇の義に用ひた。公家仙洞のもてあそびもの」などいふたのでも分る。後には武家に對して、朝廷に仕へる官人の稱となつた。公家衆、公家法度など。

宣旨、令旨。宣旨といふのは、任官等の時、上卿から外記に下知する状をいふのである。令旨は東宮、三宮、親王、中宮の命令を記した文書をいふので「以仁王の令旨を奉じ」などある是である。

堂上、地下。堂上といふは、昇殿を許されたる人をいひ、地下とは昇殿をゆるされざる人をいふ。堂上は清みてよむべし、地下は濁りてよむべし」と貞丈雜記にある通りである。

二 本居宣長の學問上における事蹟を略叙せよ。

宣長の學術界に功績のあつた事は、徳川時代新井白石より外にその比を見まい。前後著された書は、數十百部一々擧げることとは出来ないが、まづ古歌古文を註釋したもの

には、古今集遠鏡があり、歷朝詔詞解があり、又源氏物語玉の小櫛には、源語に關する諸書の批評及異同の辨解あり。萬葉集玉の小琴には、諸書の異同を訂正し、それを評論せられてをる。音韻の方では、漢字三音考、字音假名つかひ、字音假名用格、地名字音轉用例などがあつて、於乎の所屬を辨し、音韻の學を正し、紐鏡、詞の玉の緒御國詞活用抄などを著して、文法語格の發見をなし、係結の用例を示して、先人未發の説を開き、直毘靈、葛花、鉗狂人などいふ書を著して、神道國體のことを説かれた。又宣長畢生の力を注がれたのは、古事記傳である。其の師荒淵も手を着ける暇がなく、古事記の註釋をば宣長に托せられたから、三十五歳の時から稿を起して、六十五歳で古事記傳四十四卷を脱稿せられた。その考證の精密で、千載の疑團を氷解せられた事は、吾々後學の者は實に感謝しなければならぬ。又玉勝間を著して、國語學上の評論を試み、石上私淑言には、歌論を發表されてをる。

三 左の文を文章法の上より解剖せよ。

主語 (人が) さしたる事なくして 人のがり行く事 はよからぬ事 なり (若し人が) 用ありて行

主語

副詞的修飾語

補足語

副詞

形容的修飾補足

說明副修

主語

副詞的

修飾語 全上 或明語 主 部 副修 或明語
きたりとも 其事はてなば とく かへるべし (人ノ) 久しく 居たる (ハ) ひとむつかし。

(補説) 括弧内の語は補つたのである。初句の「人がさしたる事なくて人のがり行く」は事の大修飾語で、之を形容してをるのである。故に實は事が主語である。左の書につきて知れる所を記せ。

文心彫龍。通鑑綱目。

一、文心彫龍。梁の劉勰の撰した書で、詩文を評論したものである。十卷あつて上下二篇に分つてをる。上篇二十有五體裁の別を論じ、下篇二十有四巧拙の由を論ず。序志一篇を合して亦二十五となる。この書は文の利病に於てその微妙を窮めてをる。文を論ずる書には、この書より古いものはなく、亦この書より精密なものはない。

一、通鑑綱目。この書は又資治通鑑綱目ともいふので、五十九卷ある、宋の朱熹の撰したものであれども、其門人趙師淵の手になつた所が多い。司馬光の通鑑によつて、別に義例を作り、綱と目とに分け、綱は朱熹自ら其要を提げて、褒貶の微意を寓し、目は師淵に命じて之を拾ひ集めさせたから綱目と名づける。周の威烈王二十三年から後

周の世宗の時まで、千三百六十二年間の事を記してある。明の商輅が續編を作つてをる。

(一) 普通文 公德

(二) 國文漢譯

日本に鐵道の通じたのは明治五年に東京と横濱との間に通じたのが一ばんはじめである。それからおひ／＼諸方に通じて今では遠方へ行くにも汽車に乗れば早くて便利で昔の遅くて不便であつた事は汽車中の笑話となつてをる。

日本鐵路。明治五年以通於東京横濱間。爲其始。爾來欲敷設于諸方。至現今。欲行旅之速且便者。必乘汽車。而古昔旅行之困難且要多數日子。今爲汽車中笑話。

解 釋 (共通の分)

一 承平の將門天慶の純友康和の義親いづれも皆猛かりけれど宣旨にはかたざりき保元に崇徳院の世を亂り給ひしたに故院の御位にてうち勝ち給ひしかは天照す御神もみもすそ川の同じ流と申ながらな波時の帝を守り給はする事は強きなめりとぞ古き人々も聞えし又信賴の衛門督おほけなく二條院をおびやかし奉りしも遂に空しきかばねをぞ道のほとり捨に

てられけるか、ればなりにし事を思ふにもなほさりともいかに三皇今上あまたおはします王城のいたづらに亡ぶるやうやはあらんとたのもしくこそおほえしにかくいとあやなきわざの出で來ぬるはこの世一つの事にもあらざらめをも迷のおろかなるまへにはなはいとあやしかりし。(増鏡)

(語釋) みもすそ川の同じ流。御裳溜川は伊勢神宮の前を流れてをる川であるから、天照大御神の御末のことに喩へる。即ち同じく天照御神の御子孫なからの意。〇衛門督衛門府の長官をいふ。この時信賴は右衛門督である。〇おほけなく。負氣なくで、力に餘ること即ち相應しないことである。〇あやなきわざ。三上皇は遠島せられ今上は廢せられるといふわけの分らぬ事をいふ。

(意解) 將門純友義親の三人共に謀反して、隨分勢がよかつたが、宣旨を下されて、追討せられたものであるから、遂に勝つことが出来んで滅びてしまつた。保元年中に崇徳院が重祚せんとして、亂を起しなされたまへ、後白河院在位の時、打勝ちなされたから、天照大御神も同じ御子孫といひながら、猶ほ寺の天皇を別段に守護なさるものと見ると、昔の人も申しました。又右衛門督信賴は自分の力身分も顧みず、

二

二條院をおびやかし奉り、大臣大將にならんとしたが、遂に屍を路傍に曝し、非望を遂げる事は出来なかつた。かやうな譯で、舊き例を考へても、まさか後鳥羽、土御門、順徳の三上皇と今上とおはしますものを、どうして玉城のつまらなく滅びるやうな事があらう。と力強く思つてをつたに、かやうな思ひがけない事が起つて來たのは、この世ばかりの事でもなく、前世の宿縁であらうとは思ふが、吾々のやうに愚鈍で迷ひの心を去ることの出来ない凡人には、なほ實に怪しく不思議でたまらなかつたとなり。ほととぎす聲も聞えず山彦は外になくねをこたへやはせぬ (古今集)

(語釋) 山彦は木靈である。樹神ともいふ。〇こたへやはせぬ。答へるがよいではないかといふ意。

(意解) これは「さぶらひにてをのこ共酒たふべけるに召して郭公まつ歌よめとあはければよめる」と詞書ある躬恒の歌である。一首の大意は、郭公の一聲を聞きたいので、待ちに待つてをるが、少しもなく音を洩さぬ。木靈は、他の方面でなく郭公の聲を、なせ答へぬであらう。外になくねでも、それを反響して聞かせてくれたなら、少しは慰める事が出来よう。と待つ心の切なる

意をよんだものである。

へだてゆく世々のおもかげかきくらし雪とふりぬる年の暮かな (新古今集)

(解釋) これは年の暮に雪の降る時分、子供の時分から今までの事を思ひついでて咏じた歌である。

一首の大意は、一年毎に段々隔つて行く、昔の世のさまざまの様子が、かきくらし雪の降るやうに、茫々然として往事夢の如しといふ有様になつて行くとしの暮かな。實に昔の事を思ふと、心細き感じがすると也。

解釋及讀方 (共通の分)

三 宰我子貢有若。智足以知聖人。汗不至阿其所好。宰我曰。以予觀於夫子。賢於堯舜遠矣。子貢曰。見其禮而知其政。聞其樂而知其德。由百世之後。等百世之王。莫之能違也。自生民以來未有夫子也。有若曰。豈惟民哉。麒麟之於走獸。鳳凰之於飛鳥。泰山之於丘垤。河海之於行潦。類也。聖人之於民。亦類也。出於其類。拔乎其萃。自生民未有盛於孔子也。

(孟子)

(語釋) 汗。迂曲の迂に全じ、たとひ迂曲して之を言うても意○予。宰我の名である。

る○等は等差をつけること○垤は小丘。行潦は「ニハタツミ」と訓じ、水溜りの義○拔乎其萃。拔は特起すること、萃は聚りであるから、衆人中よりぬけ出て居るといふ意である。

(意解) 宰我、子貢、有若は、何れも孔子の高弟で、その智は聖人を知ることが充分出来る。如何に言を迂曲して巧にいひくるめても、其好む所に阿諛する様にはならぬ。宰我が曰ふには、予から夫子を見ると、夫子は其の學徳に於いて慥に堯舜に勝つて居る。残念な事には戰國亂離の世に出たから、其の功業は堯舜に勝る譯にはいくまいが後世に教を垂れる事は確であると。子貢が曰ふには、禮は政の根本であるから、其の禮の行はれると否とを見れば、其の政治の良否を知ることが出来る。樂は又國民の心を和らげ、其の徳を進める愚であるから、其の樂の正否を見て、國民の道徳が進んで居るか否かを推知することが出来る。故に百世の後から百世の前の王を等差するに、決して違ふことはない。今その禮樂を見て百世の王を品定めするに、人が此の世に生れてから、孔子の道より整備して居るものはないと。有若の曰ふのに、たゞ聖人ばかり人民より拔んでゝをるのではない、走獸に於ては麒麟、飛鳥の類では鳳凰、丘垤に於

ける泰山、行潦に於ける河海、皆類である。聖人が人民に於けるのも、亦同じ類である。而して、其の同類から出て、其の聚りから特に抜け出で、居る即ち衆中に超脱して居るが、その中でも未だ孔子の様に盛徳の人はない。

四 灌夫爲人。剛直使酒。不好面諛。貴戚諸有勢在己之右。不欲加禮。必陵之。諸士在己之左。愈貧賤。尤益敬。與鈞。稠人廣衆。薦寵下輩。士亦以此多之。夫不好文學。好任俠。已然諾。諸所與交通。無非豪傑大猾。家累數千萬。食客日數十百人。陂池田園。宗族賓客爲權利。橫於潁川。潁川兒乃歌之曰。潁水清。灌氏寧。潁水濁。灌氏族。灌夫家居雖富。然失勢。卿相侍中賓客益衰。及魏其侯失勢。亦欲倚灌氏引繩批根。生平慕之後棄之者。灌夫亦倚魏其。而通列侯宗室。爲名高。兩人相爲引重。其游如父子然。相得驩甚。恨相知晚也。
(史記) (第一種受験者の分)

(解釋) 好任俠已然諾。己は爲すなり。仕遂ける意。男だてを好み己に許諾したことは必ず前言を履行し、兩舌は決してしない。○潁水清云々。灌夫は潁水のほとりに居り食客日に數百人あつて、傲遊をして居つたから、潁水がい清ければ、灌氏は無事安寧であるが、潁水が濁れば、灌氏は一家族残らず刑せられるであらう。即ち潁水が無事

であれば、灌氏は充分此の地方で幅をきかすことが出来るといふ意。○亦欲倚灌夫云々。魏其侯は灌夫と心を合せ、繩を引くが如く共に力を合せて、木を根こぎにするやうに彼の平生は慕ひながら、後棄てるやうな輕薄男子を排斥して、與に交通しないやうに爲ようとする。○爲名高。名聲を馳せて、世に憚られるやうにしたとの意。

四 本紙に句讀訓點を附し傍線の處を別紙に解釋せよ。
貞元十年。陸贄罷。十一年。貶贄忠州別駕。贄自奉以來。宣力最多。隨事論諫。剴切百奏。常追仇盡力。又被潛。故貶。初夏縣陽城以處士。徵爲諫議大夫。皆想望風采。在職七年而不諫。韓愈作諍臣論譏之。至是判度支裴延齡譖贄。城率諸諫官。守闕論延齡姦佞贄無罪。時朝夕且相延齡。城曰。脫以延齡爲相。當取白麻壞之。慟哭於庭。遂沮。城左遷國子司業。後又貶道州刺史。治民如治家。自書其考。曰。撫字心勞。催科政拙。考下下。(十八史略)

(第二種受験者の分)
(解釋) 帝追仇盡力。前日直諫して言を盡したのを仇とする。○韓愈作諍臣論譏之。韓愈の諍臣論は、文章軌範にも載つて居つて有名なものである。これは諫議大夫たる者の職責を論じて、大に陽城を譏つたのである。○白麻。延齡を相とするといふ制勅を寫

した白麻紙を取つて、之を破毀しようといふので、唐制に王を封じたり相に拜したりするときは白麻紙を用ひる。又一説に制には白麻紙を用ひ、詔には白藤紙、書には黄麻紙を用ひるともある。○自書其考曰云々。考は其功を考實するのである。而して、考功法には四善及二十四最の目がある。そして優劣を比較し、差するに九等を以てし、之に因つて昇降をなすので、九等は上中下とし各又三等ある。撫字の字は愛する意で百姓を愛撫するに心を勞するといふ意。催科政拙の催は賦税を督促すること。時に道州の賦税が納まらないので、數々觀察使から責められた。それ故に考功の等級を上るに當り、政は實に拙劣であるから、考は下の下と自ら書したのである。

五 酌酒與裴迪 (第一種受験者の分)

酌酒與君君自寬。人情翻覆似波瀾。白首相知猶按劍。朱門先達笑彈冠。艸色全經細雨濕。

花枝欲動春風寒。世事浮雲何足問。不如高臥且加餐。(唐詩選)

(解釋) 一杯の酒を酌んで君に進上するから、君も暫く不平を忘れてゆつくりし給へ。兎角人情といふものは、變り易くて翻覆の常ないことは、波瀾の一起一伏するやうなものだ。幼少の時から交際して、今は白髪を戴くやうになつた人でも、時によると劍

を按するやうになる。又朱門の立派な家に住む既に立身した人も、我々を推舉して、れるだらうと、冠を弾じて待つて居るけれども、それを却て嘲笑するやうな譯である。小人に喩へられる草の色は、細雨の惠を受けて濕ひ、實に好い色を呈して來たが、君子に喩へられる花の枝は、花を開かんとして春風なほ寒く、開くことも出來ぬ様である。世の中の富貴は浮雲の如くで、何も羨しく思ふには當らぬ。それで有るから、寧ろ枕を高くして身體を養ひ、甘ひものを充分食し、安樂に暮して、時節の來るのを待つに如くはない。と輩迪の心を慰めたのである。

五 寄令狐郎中。(第二種受験者の分)

嵩雲秦樹久離居。雙鯉迢々一紙書。休問梁園舊賓客。茂陵秋雨病相如。(唐詩選)

(語釋) 嵩雲秦樹。各相隔つて居ることを喩へたのである。嵩山に居るから嵩雲といひ、秦國に居るから秦樹と面白く書いたのである。○雙鯉。書信のことを云ふ。古樂府ニ客從_三遠方_一來。遺_三我雙鯉魚_一。呼_レ童烹_三鯉魚_一。中_有三尺素書_一。長跪讀_三素書_一。書中意何如。上有_レ加餐食_一とあり。○梁園舊賓客。司馬相如是梁の孝王に知られて、梁に遊んだから、かくいうたのである。○病相如。相如是後茂陵に引き籠つて病臥して居つたか

ら、諭へたのである。
(意解) あなたと私とは、大層隔つて居る事故、雙鯉の腹中に半紙を入れて送つても
迢々と遙に離れて居るから、音信を通ずることも出来ぬ。別に御尋ね下さるには及ば
ぬ。私は先年種々あなたの御厄介になつた食客であるけれど、今は進取の氣象も失せ
て、茂陵に引込んで、秋雨の寂しげに降るのを眺めて、病臥して居る司馬相如と同様
であるとなり。

國語漢文檢定試驗答案

終

明治四十三年八月十七日印刷
明治四十三年八月廿一日發行

(國語漢文檢定試驗答案)
正價 金五拾錢

送金ノ便法

振替貯金ニテ送金ナリ
紙金トシテ送金ナリ
及金高トシテ送金ナリ
姓名ノ在リテ送金ナリ
出スル所ニテ送金ナリ
ニテ送金ナリ
勿レテ送金ナリ
シテ送金ナリ
テ送金ナリ
ルテ送金ナリ
法ナリ

著作權所有

著者 三幣嶺南

發行者 岩崎鐵次郎

印刷者 木村榮吉

印刷所 英文社

東京市京橋區采女町九番地

發兌元

東京市神田區鍋町廿一番地
電話本局三〇六七番
振替貯金口座番號四五二七

大學館

漢詩入門叢書

● 大橋直哉先生著 第一作法漢詩獨習 郵價 稅廿四錢

● 早稻田大學講師古城貞吉氏序 井口駒北堂著 第二白樂天詩集評釋 郵價 稅廿四錢

● 子爵戸田忠義君題 井口駒北堂著 第三李太白詩集評釋 郵價 稅廿四錢

● 桂湖村先生題詩 井口駒北堂著 第四杜子美詩集評釋 郵價 稅廿四錢

● 文學士内海月枝序 井口駒北堂著 第五陶淵明詩集評釋 郵價 稅廿四錢

● 文學士笹川臨風序 井口駒北堂著 第六蘇東坡詩集評釋 郵價 稅廿四錢

漢詩入門叢書

● 大橋直哉先生著 第一作法漢詩獨習 郵價 稅廿四錢

● 早稻田大學講師古城貞吉氏序 井口駒北堂著 第二白樂天詩集評釋 郵價 稅廿四錢

● 子爵戸田忠義君題 井口駒北堂著 第三李太白詩集評釋 郵價 稅廿四錢

● 桂湖村先生題詩 井口駒北堂著 第四杜子美詩集評釋 郵價 稅廿四錢

● 文學士内海月枝序 井口駒北堂著 第五陶淵明詩集評釋 郵價 稅廿四錢

● 文學士笹川臨風序 井口駒北堂著 第六蘇東坡詩集評釋 郵價 稅廿四錢

侯爵西園寺公望君題字 鹿門先生序 財間榮先生編 (十一版) 價三十錢 郵稅四錢

● 紙數二百五十頁 必携 熟語成句詳解 價三十錢 郵稅四錢

因循○優柔不斷○乙夜之覽○暴虎憑河○馬耳東風○亡羊之歎○莫逆之友○破瓜之齡○塗炭之苦○等○熟語等數千を聚めて之に精密の意義、文字の出處、故事來歴等を詳説して、之を、いろは別區別し、尙ほ索引に便なる爲め種類目錄をも付し、あれば引用に便にして、文筆に従事する者の座右必須の要典なり。

文學士栗本木岡君序 渡邊幾石君著 (七版) 價拾五錢 郵稅四錢

● 紙數二百三十頁 美文 麗句 價拾五錢 郵稅四錢

季候(春夏秋冬)地理、天文、人品、品性、人情、人事に分ち更に百有餘の細目に分ち古今和漢の名著中より作文の資料となるべき美辭麗句を檢舉せるもの也、文人は勿論青年學生が座右に缺く可からざるの寶典なり。

河村北溪先生著 必携 熟語故事辭典 價廿五錢 郵稅四錢

● 紙數二百六十頁餘 必携 熟語故事辭典 價廿五錢 郵稅四錢

本書は熟語成句詳解に漏れたる故事熟語を集めて猶廣く詩文小説戯曲中の新文字を加へたれば、兩書は恰も車の兩輪の如く相共に離る可からず、讀者これに依て汗牛充棟の書卷を繙讀するの迂遠を免れ、一朝にして漢學を通たる可し、寔に作文修辭の好參考書たるを以て全國中學師範校の參考書となすに適當無比の書也。

河村北溪先生著 作文 麗句類纂 價貳拾錢 郵稅四錢

本書は麗句の文章を作るに裨益あるものは和漢古今を論せず悉く採り盡せり、天文、地理、時令、官品、人倫、人品、言物、人事、人情、氣質、行爲、藝術、言語、衣食、家居、軍旅、交際、動植の十部門に分ち更に之を細別して百五十餘の部としてなり、殊に是れ需用の索引に便せんとし、また辭書に依頼するの煩なし。

文學士宮本正貫先生序 虎城山人編

作文助字用法詳解

(七) 價拾五錢 郵稅貳錢

也。矣、焉、則、乃、即、輒、便、載、就。既、已、業。反、還、却。願、回、等の助字數百を集め、これを決定、怪疑、發問、願望、禁止、命令、被令、分別、形狀、想像、發端、歎息、指示、續、推、變、關係、反動、假設、時、刻、條件、分量、比、題、反對、發着等第二十五章に分類し用法選用に就て例題を引用して詳説す。

虎城山人編

和文漢譯秘訣

(四) 價拾五錢 郵稅貳錢

和語を漢語の語勢に變ずる練習法より復文十數例を擧て語句の轉例配置を一字一字詳説し又譯文の異同を識別し譯文の運用變化を會得せしむる爲め同一文を數種に漢譯したる名家の和文漢譯例を示し譯文の方法秘訣を詳説せり。

河村北溟先生著

漢文白文訓點解釋法

價三拾錢 郵稅六錢

漢字、音訓、句讀、段落、訓點、復文、譯文、解義の諸節を總論とし、白文訓點、白文句讀、白文直譯、白文解釋を實地練習とし古今和漢の文章中模範とすべき名文を撰拔し諸學校漢文試驗問題答案高等學校海軍兵學校を始めとし十有數校を網羅したり。

千葉義重先生編

用言國語早わかり

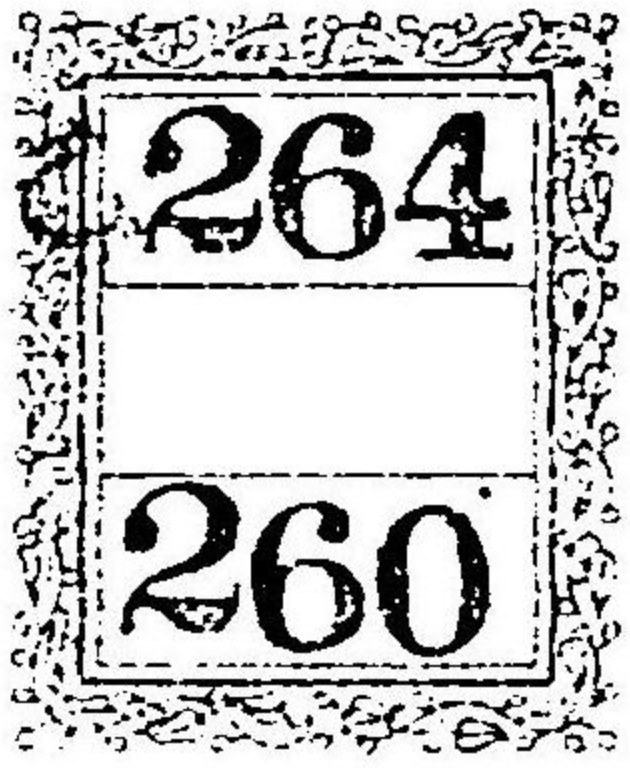
(再版) 價十五錢 郵稅四錢

第一高等學校教授 今井彦三郎先生序文

「用言國語早わかり」と「誤り易き國文法」とは共にわが知り人千勝氏の著す所なり一は専ら動詞、助動詞等の語尾の變化、亦たその法を説きあかされたもの、一はその用法につき誤謬に陥りやすきを示されたる外、この種の書にも説き出されたり。この書を見るに體裁の綿密なるはあらむ、證の宏博なるはあらむされども多くは言語學に泥み、あるは外國文典の型に據れるなど、やもすれば、系統的に流る、弊ありて、爲めに初學者もしくは少年者に望洋の歎あらしめ、直ちに實用に資するの便をかく憂ならずや、予の常に思へることも動詞、助動詞の系統的に學べる文典の知識なからんことも動詞、助動詞の語尾變化とその用法を能く教へて、そなへしも誤ることあらざれば無益に時を費すことなく、中々に文を學ぶ人の捷徑たるべしとせり、これによりて「用言國語早わかり」近頃予のいたく同意を表するところにて且つはこれに加ふるに「誤り易き國文法」を著はして、その誤謬に陥りぬべきふしを並舉したるさへあるは至て心切の企もいふべし説の取捨に至りては世には人の考へあらむ予もまた無きならぬと大むね、古來の定説によりてあへて奇僻の說なきは予のみに喜ぶてはし書きする所になり、この書單行して固より不可なるべし二書照合して見んには更に發明するところあらむやうせられしは蓋し著者の注意を加へしにこそ千葉義重先生編

誤り易き國文法

(再版) 價十三錢 郵稅二錢



264

260



三幣嶺南編

國語漢文檢定試驗答案

附檢定ニ關スル規定及受験者ニ注意

東京大學館發兌



049850-000-8

特26-207

国語漢文檢定試驗答案

三幣 嶺南/編

M43

BEM-0584

